
うちの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

スリザス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

【Nコード】

N9140Z

【作者名】

スリザス

【あらすじ】

前世が日本人で異世界転生したが、村八分で貧乏極まって自殺寸前。

そんな悲惨な境遇の開き直り型主人公がひょんなことから幼女な神様の使徒に。

色んな能力を貰ってダンジョンで暴れまくり、治癒能力やアイテムで怪我人や病人を治したり、商売をして優秀な部下を得て、領地を手に入れて内政したりして活躍する予定。

しかし元の村ではあい変わらずつまらない村人たちに迫害され続け

る物語。

ただの暇つぶしの殴り書き作品です。

ハイリスクノーリターンノークレームの軽いノリでお楽しみください。

第1話 胎動

よく小説とかで転生とか生まれ変わりとかが聞くけど、俺はそういうものは信じていなかった。

死んだら人間はそれまで。赤子でもわかる真理のひとつだ。

大体にそんな誰もかれもが生まれ変わっていたら、何十代もの大昔の記憶とかが延々と残っててまったく思い出さないとか実際おかしいだろ？

まあそれ以前に記憶は脳にあるもので、生まれ変わりで前世の記憶とかがある方がもっとおかしいと思うんだが……

何が言いたいかというと……

「何で俺に前世の記憶があるんだよ！」ってことだ。

前世の記憶、俺が日本という国に生まれ、牛井のサンボでワンコインで大盛りを頼み、そして暴走トラックに撥ねられて死んだまでの人生の記憶。

気楽な小説の中では転生なんて好物ですとか言われてそうだが、自分で経験してみるとこの記憶は今の世界、なんというか異世界っぽいところでは邪魔モノでしかなかった。

何しろ赤ん坊の頃からぼんやりとだが自我があつた。そのせいで日本人としての精神ではちょっと耐えにくいようなことが次々と経験させられ……

生きてる芋虫を食べさせられたのはカルチャーショックどころではなかったよ。今では気にせず食べられるけど。

他にも笑わない子とかのレッテルをつけられ、下手に日本語の下地があるおかげで言語の習得が平均よりだいぶ遅れたり、素直に子供として振舞えないから何を考へてるかわからないとか裏で何してるかわからないとか、西洋人が日本人を、田舎の人間が都会の人間を表現するような評価をいただきまくったり、色々と酷い人生を送ってしまった。

日本人の知識を利用してチートしまくり？

まったく無理。

というか無理。

絶対無理。

ちょっと考えればわかると思うが、清く正しいヘタレ日本人が中世レベルのところに転生して幸せに生きられるかと。

ほんのちよつとでも周りと違うことをするとすぐ注目される。その

注目つてのも悪い意味での注目だ。いわゆる魔女裁判のような雰囲気になる。

算術が出来れば就職できる？

就職が出来るのはお偉いさんの身内とそこご機嫌をひたすら取れるクズのみ。

むしろ高度な能力なんて見せたら、拉致されて奴隷として高値で売られて一生無賃で働かされるだけだ。

ここら辺のクズさ加減は、前世の世界となんら変わらない。

出来ることと言えば周りと同じことをするだけ。

それも力仕事ばかりで理系人間の俺にはついていけず、無理をしすぎて半病人のような状態で今までのすごしてきた。

ま、その話は今は置いておいてもかまわない。ぶっちゃけ今そんなことを気にしてる状態じゃあない。

わかりやすく言うと「村八分されてて、親が行方不明で、我が家の経済状態が最悪で、体調も悪くて、夜逃げ寸前だけど逃げる場所も無い」という感じ。

もうどうしようもない。

左手に首を吊るロープがスタンバってるんだ。

あまり仲が良いとも言えない両親は、半年前に二人で王都に出稼ぎに行ったがそれ以降なんの連絡も無い。

兄貴がいたが俺が5歳のころに魔物にやられて死んだ。

つまり身寄りが一切無い。

「おわた。人生またおわた。神様つまらない人生をありがとう」

でも最後になんか美味しいものでも食べたいな。

裏手にあるみすばらしい倉の中から売れるものとかを物色するか。

どうせ売るのも面倒になるような値段のゴミしかないんだろうけど……ね。

今までダルくて調べなかったような物資もすべて調べまくるために、荷物は全部外に出すようにする。

かなり大掛かりな物色だ。子供の頃から探検みたいに何度もしてるが流石にここまで大げさにしたことはない。

何か良い値段で売れるものでもあれば……と期待はするが、内心では殆ど諦めている。

今こうして倉庫を調べてるのも、結局は惰性みたいなものだ。

でもま、何もしないよりは気が晴れる。

そしていくつかの剣や箆手やらのあまり高価でなさそうな冒険者用の装備以外はボロ布や木製のガラクタなど大したものも見つからず、最後の荷物を調べる。

「何だこの箱、重すぎる。いや、これ床に引っ付いてるのか」

動かそうとしたときの感覚が、重いものとしては何か違和感を感じる。

中がまるで空っぽのような感じの頑丈な木箱の蓋を開けてみると予想外に軽く開いた。

「なんですか、コレは……………」

どう見ても階段。

斜め横から見ても上から見ても階段。

多分、前と真横からだとも木箱にしか見えないが。

おそらく地下室へと繋がっているんであるうと思われる階段の奥は、光ゴケでも使われているのかボンヤリと明かりが見える。

いったいその先に何があるのか。

予想その1はお宝がザックザクと。あるわけないだと自分でツツコミいられるが。

予想その2は親父の隠し酒蔵だが、隠す意味あるのか微妙？

予想その3は迷宮。うちの倉はダンジョンの上にたっていた！わけないよね。

危険があるかもしれないので、見つけた装備を適当に身につけてから降りることにする。

「さて、鬼が出るか蛇が出るかいつちよ行ってみるか」

第2話 受肉

「うおおおおおう、凄いなこれ」

階段は予想以上に狭くて長かったが、特に問題なく最深部まで到達。100畳以上あるような広さの部屋の入り口から中を眺めると、高価な明かりの魔道具によって煌々と照らされる純白の石つくりの壁面、そして中心後ろよりに設置された荘厳なつくりの祭壇。

そこはまるで以前にクラスの取得のために行かされた神殿のような雰囲気がある場所だった。

ちなみに取得したクラスは 村人F である。村人にもランクがある。Fは貧民みたいなものさ。ハハハ。

あまりの光景に数分ほど呆けていたが、とりあえずお邪魔しますと小声でいいながらオズオズと部屋に入っていく。

入り口からもみえていたが、祭壇の御神体はどうやら女神様のようで、槍を持った凛々しい戦乙女のような大きな彫像が異彩を放つ。

祭壇への緩い階段を昇ると、その御神体の大きさに圧倒され、まるで実際に神様の前に連れられて右往左往するちっばけな人間のような感覚になる。

そんな雰囲気流されてではあるが、唯一知っているこの世界での神への祈りの聖句を思わず口ずさんで祈りをささげる。

「いあ いあ くらうるふ ふたぐん！ ………………」

そして何かわけのわからない達成感を得つつも、いったん今後のことを考えるために帰ろうと祭壇を降りると、視界の隅のテーブルのような場所の上にさっきまでは無かったはずの彩りが見える。

「ん？ なんだ？」

一見してみると果物や肉、っていうか食料に見える。一応近づいてみるとやっぱりなぜか食料が山盛りに置いてある。しかもかなりの高級品ばかりに見える。この世界で17年生きてきたがいつも芋と雑穀と野草ばかりで、ここまでの高級品はそう何度も食べた記憶すらない。

「これってもしかしてお供え物だよな。でも誰がいつの間に持ってきたんだ、さっきは絶対に無かったはずなのに」

そういつて姿形がリンゴもどきのティーアコと呼ばれる果物を手にとって見る。

（うーん、凄い良い香り。すみません、もう我慢できません）

空腹もあいまって、ついつい口に運んでしまう。

大きなティーアコにかじりつくと、リンゴとオレンジの合わさったようなみずみずしい味が口の中に広がって、久しぶりの美味に歓喜が生まれる。

それからもう、俺は飢餓感に押されて堰が切れたように完全に無心のままひたすら涙を流しながら貪るように食い漁った。

そして腹も膨れてもう食べられないといった状態になると、途端に正気を取り戻す。

「俺はなんてことを……………神様への供え物を横取りとか、神罰下るぞ……………」

しかし何でこんな隅のほうに供え物が置いてあるのか。

普通は祭壇の方に供えるはずでは？

もしかしてお供え前にいったん置いてあるだけか？

とりあえず食べてしまったからには仕方ない。

俺は開き直ってはみたものの、このままやってしまったことを捨て置くには堪えられない心境だったので、自分なりの誠意を見せようと、まだ半分以上余っている食料のうちのいくつかを見繕って抱え、

「すみません、神様。お供え用の料理を作ってまいります」

と、一応逃げるわけではないと宣言をしてから階段を上がって家に戻り、

そして台所の竈に火を起こしながら、作る料理の内容を決めていく。

（燻製肉は塩気が強いからこのままじゃ食べにくいだろう。なら削り取ってスープのダシにしようか。後、この粉物はパンを焼こうかな。日本で食べたような柔らかいものは無理だろうが焼きたてはおいしいはず。それとこっちの野菜は干しキノコからダシをとって浅漬けにしてみようか）

和洋中華がごちゃまぜだが、もう気にしない。

第一、日本の定食屋のメニューとか弁当とかもそういう部分はめちゃくちゃだったし。

感性が日本人なんだから仕方ないだろ？

元日本人舐めんなよって意気だ。

そしていままで材料すらなかった為に発揮できなかった日本人としての食への拘りをフルに發揮して渾身のメニューを作り上げる。

「出来た！　これが俺の究極のフルコースだ！」

まあそこまで言うほどのものでもないが、日本人としての感性で作ったから、この世界でのまずい食文化からは多少は逸脱したものが作れたはず。

特にさつき味見した、白身魚のフライのタルタルソース添えとかはこっちはまず無い料理で絶品である。

一応来客用の食器に盛り付けたがやはり供え物としては食器が微妙に見える。

だがせいっぱいの努力はした。

後は冷めないうちに持っていくだけだ。

祭壇の部屋への階段を足早に降りていくが、何故か普段より体調がよくて足取りが軽い。

おそらくあの時たらふく食べたせいだと思う。

栄養素が足りなかったんだろうな、色々と。と今までのあまりの自分の貧しさに今更ながら呆れてくる。

前に聞いたことがあるが、日本人は昔は寿命が50年だったらしい。

それだけ食べ物ってのは体調に直結する。

それに未開人は薬が異常に効きやすいつてのとかも関連して、必要な栄養分が色々と足りなかったために今回過剰に体調と栄養摂取が直結したんだろう……

「お待たせしました。神様」

返事がかえってくるはずもないが、一応気分として口に出しながら祭壇の台の上に料理を捧げる。

そもそも殆どの宗教が、返事もしない神様に祈りをささげてるのだから俺がこうして神に語りかけても可笑しいと言われる筋合いも無いだろう。

「神様の為に精一杯がんばって料理をさせていただきました。気に入ってくださいましたら先ほどの無礼はどうかどうか水に流してくださいさるようお願いします」

大げさにジェスチャーを加えながらひたすらへこへこと謝る。

「で、では、ごゆっくり」

なんだか態度にレストランのウェイターとか怪しいホテルの従業員とかが若干混じっているようだが、気にせずに強引にすすります。こういうのは勢いが重要なのだ、そうに決まってる。

とりあえず逃げ帰るように部屋の入り口のほうまで後退した俺は――

祭壇のところに設置されている高さが人の背丈ほどもある鏡、いわゆる姿見から――

なにやらちんまい幼女が、ごく自然と現れて、俺の作った料理をパクッとほおばるのを

見た

第3話 邂逅

えええええ、なにしてくれちゃってるのこの幼女は。

いや、というかむしろこの娘が神様？

た、確かになにか神々しい感じはするけど、御神体とかけ離れすぎだろう？

身長とか、特に胸のボリュームとかがA - からH + までかけ離れてる。どっちがA - かは察しろ。

とりあえず状況把握の為に祭壇そばまでにじり寄る。

特に警戒される様子もなく、なんとかというか緊張感の欠片もなさそうな雰囲気だったので更にそばまで近寄った。

こぼれるような無邪気な笑顔でこちらを見つめる女神様？

近くで見ると、あの有名な 赤さんの成長後 と噂された写真の美

少女のような顔立ちである。実際は違うらしいが。

こちらは金髪、いわゆるブอนด์ヘアーだけだね。

あ、ほっぺにタルタルソースついてる。

「え、えーと、お味のほうはどうでしょうか？」

「おいしい！」

「そ、そうですか」

「おいしいね、これ」

そういつてちんまい女神様が食べてるのは俺の渾身の作である、白身魚のタルタルソース添えだ。

あ、今度は鼻の頭にタルタルソースがついた。

「お兄ちゃん、料理上手なんだ？」

これは、この眼はあれだな。よく小学生とかに一発芸とかを見せると妙に興奮してウケられて、そのまま尊敬されもみくちやにされ、おまけに膝を蹴られまくるアレだ。

「えーと、はい……ありがとう?」

天使のような笑顔でパンにパクつく女神様。

ダメだ……あまりの状況に俺の頭はパニック寸前でどうにも事態の把握が不可能である。

この状況は、これからいったいどうすれば良いんだ……

解決の糸口になりそうなこの少女は食事に夢中で会話になりそうも無い。

というか、この無邪気な笑顔には、色んな質問とか小難しい理屈とかがまるで通用しそうに無い。

ぶっちゃけて言うならば、手持ち無沙汰でこの場に居るのが苦痛である。

もうさあ、この少女様が食事に一息ついたらストレートに聞いてみるしか方法はないんじゃないか。

というわけでしたらウニウニとしながら（チクチクと刺されるような心地で）まってみて、ここぞというタイミングを計って聞いてみた。

「あ、あのー」

「なーに？」

「もしかして……貴方が女神様ですか？」

「うん！」

「おおお、やっぱり。あまりにも御神体とあんなことか……」

「ヤバっ、最後のほうとか小さな声で言ったのに、今一瞬幼女様の眼が凍ったように見えたよ。この話題は禁句ですね。」

「そ、そうだ。実は先ほどあそこのテーブルに置いてあった食料をわたくしめが食べてしまいました。この食事の材料もそうなんですけど。その節は大変たいへん申し訳ないことをいたしまして……」

「俺は使い慣れないヘタレな敬語を使つて、深く頭を下げて素直に謝つてみた。が、」

「あのテーブルの上？　はお兄ちゃんのものだよ」

「は？」

「だからね、ここでお兄ちゃんがウニユーンとお祈りを捧げると、神様パワーが充電されて、あそこのテーブルにジュバッと神の実りが出てくるの」

「神の実りとはナンデスカ？」

「信徒へのふれぜんと？」

「えええ、なんという太っ腹な。神様って信仰だけ要求して何もくれないのが普通なんじゃ……」

「それ神様じゃなくて多分悪魔だよ、『悪魔を信仰してるとこは世界に醜い争いが絶えない』ってたしかお姉ちゃんが言ってた」

「な、なんだってええええええ」

第4話 使徒

「20年ぐらい前にこの辺りに来てね。バッシュンってこの神殿を作ってみたの。で、その後はお昼ねしてたの」

俺はあれから素直にこの幼女様の話を聞き入ってる。

この祭壇の部屋は一応神殿だったようで、しかし神様ゆえのあまりの気の長さからか、作った後は興味を失い放置されて、そのまま20年ほどだらだらと寝て過ごしたそうだ。

それが今回俺が祈りを捧げたのをきっかけに眼が覚めて、更に美味しそうな匂いがしたのでこっそり実体化して食べにきたそうなの。

しかし何でこんなド田舎の地下深くの目立たないところに神殿をと思って理由を聞いてみたのだが、「えへへ」と笑ってはぐらかされてしまった。なんとなくだが明確な理由がまったくなさそうに思えるのは俺だけだろうか。

もしくは思いもよらないようなとんでもない理由があるかもしれない。ほんとは無いと俺は思ってるけど。

少し考えにふけて幼女様から眼を離していたが、気がつくと同じくそれこそ穴が開くような視線で俺を見つめている。

なんというか、これは、尋常じゃあない気配が漂ってる。

俺は思わず身をすくめる。

なりは小さくても幼女様は女神様、それを忘れてはいけない。

「すごい、お兄ちゃん、珍しい記憶持ってるね」

「！」

まさか、俺の前世の記憶を——読まれた？

「日本？ ジャパン？ ジャポニカ？」

「ジャポニカは違う。学習帳。いや、違うはないのか」

なんだろう、いきなりシリアス成分がめっちゃ大げさに吹っ飛んだ気がする。

つい死んだマグロの眼をして　それはないのA A　みたいな感じで手を振って否定してしまった。

刷り込まれた習慣というものはホント恐ろしい。

「さっきの料理はお兄ちゃんの故郷のものなんだね。わたしまた食べたいな」

「うーん、でももう材料がそこまでないから。材料さえあれば一応は作れます」

「なら今から出そう？ 祈りの聖句を私に唱えて」

「聖句ってあれですか、ぶっちゃけ本当は聖句は知らなかったもので前世での適当に唱えてしまったんですが」

俺は冷や汗をたらたら流しているような心情で、まさしくぶっちゃけてみた。

「大丈夫。凄い祈りの力が感じられて、神様の力も沸いてきたから！」

「じゃ、じゃあ、やってみますね。失敗しても許してね」

「お兄ちゃん、準備いいよ」

「では失礼して——ていび まぐぬむ いのみなんどうむ しぐな すてらるむ にぐらるむ え ぶふあにふおるみす さどくえ しじるむ ……」

「凄いパワーが来てるよ！ 後は任せて！ ばっちりだよ」

その時、視界を真っ白にさせるほどのまばゆい光が！——なん
てこともなく、ただ例のテーブルに視線を向けると、

テーブルとかまったく見えないぐらい食料品で埋まってるし。

てか、あれに見えるはレトルトのカレーじゃないか？ なんであんなもんも混じってるのよ。

他にも日本製品らしきものがいくつか。メイドインジャパンきたわあ。

「凄い、凄い、いっぱいだよ」

「ちょっと出すぎと思われませんが」

「これですっとお兄ちゃんの手料理が食べれるね！」

キラキラとした眼で期待されてしまったが、しかし俺は、

「うーん、多分それは無理……」

「え？ 駄目なの？」

「いや、実はこれから自殺しようかとおもってたり」

えっと、あまりのことに幼女様がぽかーんと口を開けて呆けています。

俺は今までの事情をとりあえず幼女様に説明することになった。

「うっ、うっっ、お兄ちゃん可哀想……」

なんか自分が泣かせてしまったようで罪悪感がハンパない。

「というわけでもう生きてるのも無理かもしれないんだ。まあ祈りで食料が出せるなら食いつなぐことは出来るかもしれないけど税金とか払えないし」

「む」

「それと食料とかを売ろうとしても大量には無理だと思う。村の中で売買用のルートが決まってて不自然に多く売ったら怪しまれて、相場を崩した罪とか言われて商人どもにどんなめにあわされるのかすらわからないんだよ」

「むっ」

「むっ……」

「あつ、だったら！ お兄ちゃん、使徒になつてみない？」

「むむむ？ 神の使徒ですか……また随分と大事に」

「うん、多分お金も稼げるし、三食昼寝付きだよ」

「なっ、どこでそんな言葉を（まあ予想はつきまくるけど）……え
っと、お願いします」

「わーい。使徒げつとだよ」

「げつとされました」

第5話 魔法

「晴れて神の使徒となったわけですが」

「ですが」

幼女神様はニコニコと笑って相槌をうつています。

なんていうか、イーね。こういうのは。

あまりにも荒んだ生活のせいで忘れてた感情が湧き出てくるようだ。

「私はなにをすればよいのでしょうか？ 使徒として」

「美味しいものを作って！」

とりあえずよだれは拭きましょう。幼女神様。

後、それ使徒の役目違うから。

「いや、それ料理人というかコックというか」

「『飯、飯！』」

幼女神様の背後に、勢いよく振られる小犬の尻尾のようなものが見えような気がするのには錯覚であろうか。

やるせない思いを抱きつつ、まずは溢れかえった食料品をチェックする為に下に降りる。

正直このままでは俺が食われそうではばい。

手早く食べられてしかも美味しいものを見つけ出さなくては……

「幼女神様、これなるは桃缶でございます」

「桃缶」

幼女神様は、高級な缶詰によく見られるペナペナのカバーっぱいのペコペコと押して遊んでおられます。

なんとこの可愛らしさ！

爺は爺は！

ひとりノリツッコミは空しいからやめるとして、

「食べてみましょうか？　しかしこれは冷やすと更においしゅうございます。ですが冷蔵庫などはございせんから難しいところですね」

「冷たくするとおいしいの？」

「はい。それはもう格別に。爺やに魔法が使えれば冷やしてさしあげるのですが、残念ながら爺のクラスは　村人F　だけで御座いますゆえ」

「えい！」

「ああつ、何をなさいます、お嬢様！」

なんだこれ、シビビつとビびれて……

ああ、やっぱりお嬢様と爺やごっこはウザったかったのか？

そして俺は意識を手放した……

「でも3秒で回復したわ」

「お兄ちゃん、もう魔法が使えるよ？」

「何ですと！」

そう俺はさっきの痺れでなんと、桃缶の魔法使いになっていた。もとい魔法使いのクラスを得ていた。

「まだいまいち実感が無いのですが、さっそく魔法を使って冷やしてみることにします」

「わーい、パチパチ」

ちなみにこっちの世界、村人でも一応魔法は使える。

3時間ぐらいウンウンうなっていると蠟燭の炎ぐらいの火がボーっと0・5秒出るぐらい。

……うん、役立たずだよね。

やっぱ魔法って憧れるから、結構練習はしたんだけど、どうやら詠唱とか技術とかよりもイメージ力とかクラスとか才能がものをいうらしくて、役に立つ程度のレベルにすらならなかった。

しかもこっちの世界では魔法が使えるゆえに、科学文明の発達が遅れているという有様。

まあそうだね。大体に現象に対して魔力とかで計算しにくい結果

が出るのなら、しっかりした検証結果を必要とする科学とか発達しにくいのは当たり前。

とりあえず、氷の魔法……は、カチンコチンになると食べないし、流水の魔法……冬の川のイメージで……いや、これも水浸しになりそう。

ならば冷凍庫に30分ぐらい入れたときの、缶の表面に軽く霜がつくイメージが丁度いいかな？

「桃缶よ。我が意に応え、冷たくなあれ！ BE COOL！」

おおお、なんか今までに無い感じで魔力が湧き出てくるのがわかる！

これが役に立つレベルの魔法の感覚なのか。

普段はジョボジョボとホースから水が出てるのを、ホースの先を指で潰して、勢いよくビューツツと出させるような感じ。男なら誰でもわかるアレだ。

それが右手に持った桃缶にまわりついて、世界を変革していくのが手にとるように感じられる。

たちまち、その手のひらには冷凍庫から取り出したばかりのような冷たさがビンビンに伝わってくるようになった。

「やりました。お嬢様、程よい冷え加減でございます。さっそく開けてみますね」

「はやくはやく」

「ほっ」

ブルトップに爪を引っ掛けてパコッと開けると、ほのかに甘い匂いが漂う。

「では、まず爺やが先に味見をしてみます」

「えー」

「おお、これはまったくとしてコクがあって滑らかで……」

「むーむー!」

「白桃とシロップの冷たさが共に絶妙。口の中に含むと桃源郷に迷い込んだ気分です」

「むっむっむっ!?!」

「なんとという至福。まるで秋山の魔法にかかったかのよう!」

「えい！」

「ああつ、ガガガ、シ、シビビれれれ」

「ふーんだ！」

「こ、これはもしかしてさっきのおおお。まままさかまたもや新しいクラスを手に入れちゃったりしちゃいますかががが？」

「ううん」

「やっぱりそうですね。うん。」

第6話 狡猾

幼女神様は只今ニコニコと笑顔で桃缶を頬張って、というか桃缶の中身を頬張っています。

しかし油断してはいけません。

私は前回知ってしまったのです。

この方が案外でんじやらすな性格をしていることを！

「では、わたくしめはいったん住まいのほうへ戻らせていただきます。これからも料理を作るために色々と準備する必要が御座いますので」

「うん。はやく戻ってきてね」

「出来るだけ努力はいたしますが、なにしろ色々と問題が山積みでして3時間ほどはかかるかもしれません」

「じゃあ、行っちゃだめ」

「……………」

でたよ、子供の我がママが……

『はやく戻ってきてね』と『行っちゃだめ』のコンボに微妙に萌えたのは内緒だが。

というか、我がママが可愛いのは非力な子供がやるからであって、神様にやられるとホントやばいよね。色々と。

仕方ない、ここは俺の老獪な会話テクニクを駆使して見事に切り抜けてみようか。

「お嬢様、今から上にいって、まさしく舌がとろけるような甘くて美味なるものを作ってまいりますゆえ、戻ってくるまではお待ちいただけますか？」

「行つてらっしゃい！」

ふっ、ちょろいな。

「では行つてきます。帰ってくるまでに口寂しくなりましたら、こちらの袋に入ったポテチなるものを食してください。パリパリとした食感が面白く、中々の美味しさで御座います。ただし食べすぎには注意ですぞ。2袋までにおさえますように」

「ん、わかった」

幼女神様に手を振られつつ、ようやく切り抜けたと内心思いながら、俺は選り抜いた食材を両手にどっさりと抱えて自らのアジトへと足を運んだ。

「さて、甘いものを作ると言っておいたから、いくつか用意はしておかないと。しかし基本的な調味料まであったのは幸運だな。これで色々日本のメニューを再現できる」

そうなのだ。あの食材の中には、塩や砂糖のみならず、醤油や味噌、その他色んな調味料まで入っていたのだ。

ちなみに植物油は最初の食材の中にもあった。

ただ生クリームとかバターとかは今回は見当たらなかったのだ、お菓子を作るのにも制限がかかる。無理をすればミルクからも作れそうだが今は機材も無いし、量を作りにくい。

そこでミルクと苺と砂糖が揃っていることに気付き、一品目のメニューは自然と決まった。

日本人ならおなじみの苺ミルクである。

作り方としては苺を潰してミルクをぶっかけて砂糖で味付けという

案外簡単なデザートだが、これは素人の作り方。

苺とミルクと砂糖が織り成す至高のハーモニーはこの方法では生まれ出でえないのだから。

完成した際に、苺の部分とミルクの部分、それぞれが絶妙な甘みを独立して持つてこそ本当の苺ミルクなのだが、多くの人間たちは砂糖味のミルクに苺を潰したものを混ぜただけのものを苺ミルクと崇拝してしまっている。

結果として、ミルクの人工的な甘味と自然な甘酸っぱさの苺が、甘いだけの苺風味ミルクとひたすら酸っぱく感じられる苺部分とへ味が分離してしまうのだ。ハレーションを起こしてしまって、至高どころかただ癩癩を起こして暴れる困ったおっさん風味の味へと堕ちてしまう……これは絶対に許せない。

まあ実際には あまおう などの高級な品種を使えば苺がミルクの甘味に負けずにそれなりのものは出来るのだが、苺ミルクには安物の苺を使うということは宇宙の真理であり、それに反することは恥ずべきことなのだ。そうに決まっている。

そこでまずは苺の表面の甘い部分のみをスプーンなどで削って分離させる。量的にはそこまでなくてもいい。これはよく苺のムースなどで飾り付けに用いられる苺の部分に相当するのでバランスが重要なのである。次に苺の芯と残りの苺をミキサーにかける。ちなみにミキサーは俺の手作りだ。そこに砂糖を程よく加えてそのまま数時間置いて馴染ませる。

その間に削った苺の赤くて甘い部分を、少な目のミルクとおおめの砂糖を加えてあえておく。イメージとしてはこの部分のみで練乳をかけた苺の味に仕上げるのだ。こうしてしばらく置いたまま、最後

に両方を混ぜてミルク部分の砂糖を調節して出来上がる予定である。

さて、次は何をしようか。

もう一品作る前に、ふつくらとしたパンを焼く為の天然酵母でも仕込んでおくか。

そうして作業は弾み、3時間は瞬く間に過ぎていったのだった。

カツカツと靴音を慣らして、祭壇の部屋への階段を降りていく。

勿論、両手には至高の苺ミルクを筆頭にいくつかのデザートがのったトレイを持っているのである。

「お帰りなちゃい」

満面の笑みで迎えてくれる幼女神様。おお、なんと神々しい……

しかしそこで俺はある異変に気付いた。

前は10袋はあったはずのポテチの袋が、何故か今はどこにも見当

たらないではないか。

「食べてない」

「……」

「食べてないもん」

「……」

「お羽が生えて、飛んでいったの」

「………はあっ」

第7話 説得

「食べたんですね……しかもポテチをぜんぶ」

「食べてないもん」

幼女神様は誤魔化す姿勢を曲げるつもりはないらしい。ナント嘆かわしい。

教育係として任されてから早10年、このまま性格が歪んだ女神様に育ってしまったら、亡くなってしまった旦那様と奥様に爺や顔向けできませんね。

「本当ですか？」

「ホント……」

ふむ、言動が小さくなる事や細かい態度などからみるに多少後ろめたさはあるようですな。

更生の余地はあるようです。ならば少し揺さぶりをかけてみましょうか。

「お嬢様、わたくしめはあれらを全て食べてしまったことを責めているわけではないのです。むしろお嬢様の身を案じているからこそ、真実を話していただきたいのです。もし食べてしまったのなら本当はほんとうにホントーウに大変なことがお嬢様の身に降りかかるのです」

「え……」

「お嬢様、気を確かに持つてよく聞いてください。まず第一にあらはジャガイモというイモ類から出来ています。イモ類は炭水化物という過剰摂取によって脂肪になりやすい栄養素から主に成り立っています。つまり太るのです。しかも悪いことに胸ではなく二の腕やお腹がです」

「うん……」

「次にカラッと揚げるのに植物油を使用しています。これらは脂質です。こちらでも基礎栄養素の中では非常に脂肪になりやすいもので注意が必要です。つまりめっちゃ太るのです。それはもう見事なほどに」

「……………」

「そうそう忘れていましたが、イモ類は腸の中でガスが発生しやすく、大量に食べてしまうと……淑女としては恥ずかしいことにおならを撒き散らすマツスイーオンになってしまいます。それはもうブーと！」

「え……」

「特にピザ味と記してあった袋、あれは我が古の祖国では『ピザデブ』という世にも奇怪な太り病を誘発する魔の食べ物なのです。勿論、爺めの忠告通り2袋までしか食べなかった良い子であれば問題はない量なのですが」

「……良い子はだいじょぶ？」

「ええ。良い子は大丈夫です。なにしろ2袋というのは爺めがお嬢様の基礎新陳代謝から華麗に計算して弾きだしたお嬢様のお嬢様によるお嬢様のための数値ですから。用法用量を守って正しくお使いくださいということです」

俺は大げさに両手を斜め上に広げるようにして、自分の論が正しいことをアピールする。

イメージとしてはカラテキッドのあのポーズの手首を曲げないバジョンに近い。

更に駄目押しとばかりにビツと人差し指をあげて追撃をする。

「しかし………良い子でなかった場合は！」

「ば、ばあいは？」

「ハート様になってしまうのです！」

「……ハート様？」

「わたくしめの記憶をご覧いただければわかるでしょう。あの存在感、こればかりは爺やをもってしても言葉で語りつくせる自信はありません」

「……うん」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「うえええええええん、ハート様いやあああああ」

第8話 格闘

「坊主、見ない顔だな。なんだその貧相な身体は。魔法使いか？
にしてはローブも着てないじゃないか」

「いやー、アハハ、色々ありまして。それはもう色々」

「まあ細かいことはいいやな。ダンジョンエキスパートへようこそ。歓迎するぜ」

「ありがとうございます。頑張ります」

いやー、まさかケンシ。ウを予想外に気に入った幼女神様が、格闘家のクラスを与えてくださって、更には鍛え上げるためにダンジョンまで送ってくれるとか、なんという急展開。

以下はその時の状況のダイジェスト

「ハート様も悪くないですよ？ あのとつぷりの贅肉でなんと衝撃無効のスキルもつきますし」

にへらっつと笑いながら言葉の追撃をする。

単純に太ることを悪く言うのではなく、あえて捻って良くいうことで攻撃力を倍増する。

この妙味。元来の性格の悪さをコアとして、その本能から迸る予測不能な攻撃を仕掛けるまさに無想技。

並みの者には真似できまい。

「ハート様絶対ヤツ！」

そして話はケンシ。ウのかっこよさへと移り、

「かの者の技と同じレベルの技を再現するにはせめてスペシャルランク程の格闘家のクラスを持っていないと無理ではないかと思われ
ます。」

「えい！」

「あがががが、またですかががが、シビシビれないようには、出
来ななななな」

「できる〜けどつまんない〜」

んで、ダンジョンへ送ってもらったときは

「実はうちの村の周りの低レベルの魔物が出る土地は全て村長一派の管理下にありまして、無断で狩りにいくと処罰されます。それ以外の魔物が出る場所は強すぎて自殺しにいくようなものです。よって強くなるうとしても手段が無いのです……」

「大変なの？」

「まさしく四面楚歌です。いや、どちらかというと八方塞がりの方が爺めの状況を言い表すにはあっているかと」

「じゃあ狩りにいくのにお姉ちゃんがいつも居るダンジョンを使えばいいよ。今送ってあげる」

んで用意も出来ず飛ばされて、ダイジェストここまで。

飛ばされてはみたものの、これどうやって帰ればいいんだ？

無一文だしヤバイよね？ 俺……

とりあえず今居るのは、帰還用の魔法陣型ポータルの前。

おそらくダンジョンへ外から来る人間やダンジョンから帰ってくる人間の目標地点として設置されているものだ。

そして目の前には小規模の街とも言える程の建物の群れが広がって

いる。

その周りには城壁というには大げさだが、柵というには立派過ぎる日干し煉瓦製と思われる囲いが見える。

「おお、これってあのダンジョンゲームにちょびつと似てないか。もしかしてボツタクリな商店とかあったりして」

とりあえず帰還に関してはじたばたしてもはじまらないし、幼女神様が呼び戻しをしてくれるのを期待しておこう。なんにせよ今は金策の情報集めに街の散策といきましょうか。

んじゃ、まずは手始めにあの見るからに道具屋ですって感じの看板を出しているお店を覗いたりしてきちゃおうか

ふむふむ、なるほど。「セーラ道具店」かあ。

いかにも美人で綺麗なお姉さまが店主ってな雰囲気の名前ですね。賞味期限切れの可能性もありますが。

それならまだしも筋肉ムキムキで髭もじやのオッサンが店主だったら俺は泣ける自信がある！

どれ、店内をちらつと覗いてみましょう。チラつとね。

おおおつ。

上品な感じにまとめられた店内のカウンターに座るは、

プラチナブロンドの髪に美しく優しそうな眼差し。少し落し気味の眼鏡が知的さをもし出し、胸は少なくとも平均以上はあるように見える、エルフにすら負けないほどの美人なお姉さんではないですか

これは反則だろう！と叫びたい。良い意味で。

って、こっち見た！

うわっ、微笑んだ……

………女神様だ………本当の女神様がこんなところに降臨していたとは。

今の俺の顔は傍から見れば茹蛸のように真っ赤に染まっていることだろう。

決めたっ！俺はこの道具店に毎日通うことにするぜ！

我ながら男は単純だなと思った瞬間であった。

第9話 虐待

ええっと、美人のお姉さんの道具屋に毎日通うことに決めたはいいが……先立つものがないわけで。

親指と人差し指でわつかを作って、『コレでんがな、コレ』とか言う、あの真ん丸いのが足りん。

お金が無くて店に入ったら、まんま冷やかしだからね！

まあそれでもお姉様の軽蔑の眼差しがゾクゾクするという変わった性癖の持ち主でもあればかまわないのだろうが。

ちなみにこうやって円形にすることから、日本でお金の単位は円となった。らしい。まったく役立たずの豆知識だわ。

後ろ髪を引かれる思いで麗しの道具屋の近くを立ち去る俺。

まずは親切そうな人から情報収集ってことで、さっきのおいちゃんのところまで戻る。

「あゝ、すみません」

「お。なんだ、さっきの坊主か」

「えっと、正直にいうと今一文無しなんです、小金でいいんで稼げる場所教えてもらえませんか？」

「はあ？ 俺も貧乏だから金はあげられんぞ！」

「たかりじゃあないですって」

「じゃあ強盗か？ 俺の持ち物で高級品はこの絹のパンツだけだ。これだけは死んでも渡さんぞお」

「そんなのいらないですって……もういいです……」

「はっはっは。冗談はこのぐらいで。ホラ、あそこに白い石造りの建物が見えるだろう。あれがダンジョンの入り口だ。あそこの1階でスライムでも狩ってから核をギルドで売れば小遣い程度にはなるぞ。1階のスライムなら一般人でも負けないだろうが多数を相手にするなよ」

「……………じゃあいつてきます。あんがと！」

「おう、頑張れよ」

おお、ここがダンジョン入り口。みたいだ。

門番っぽい人がいるな。止められたりしないだろうか。

ドキドキしつつもダンジョン内部へと足を進める。幸いながら何も

言われたりはしなかった。

入ってみると結構薄暗い。所々に光ゴケがあるのだが、それが均一じゃあないっていうのか見えやすい場所と見えにくい場所とがある。これだとゲームとかとは違って魔物に見えにくい死角から攻撃される危険率が高いんじゃないかと心配する。

だが、さらに少し進むと明かりが設置されている大きな広間に出た。そこには既に何組かの先客がいて、おのおのが斧や剣などでスライムを叩いている。

想像ではもつと戦いっぽいものかと思っていたが、なにやら傍目で見ると想像以上にスライム虐めっぽくて、なおかつ流れ作業のように機械的に行っているからシュールな感じた。

やってるのも冒険者というよりは、俺よりも年齢の低い子供たちばかりである。

手の空いている子供たちからのいぶかしげな視線をスルーして更に奥へと向かう。

この広間は狩りには適している場所ではあるが、流石にこの中で子供らと一緒に混ざってやるには少し躊躇ったからだ。

年齢的にきついのもあるが、こういう所にも俺の村のような縄張りじみた、仲間内でしか威張れない害悪にしかない人間たちの汚い専横が生まれているはず。

つまらないちよっかいをかけられて、つまらない人間と縁が出来るのも避けたい。

大体、ゴキブリホイホイの中で多くのゴキブリと混じって小さな利益に右往左往するような感じの生き方なんてのは俺の性分じゃあないからな。

人をゴキブリ扱いするなんてとか言われそうだが、日本や俺の村でもそうとしか言いようの無い人間ばかりが幅を利かせているのは事実だ。

広間を後にするとまた視界の悪い通路が広がっている。

まだ俺のMP量などを把握していないからあまり魔術は使いたくないのだが、一応視界確保はしておきたいので、候補となる魔術――

小さな電球のような光を生み出す、魔術としては初歩の初歩である
ライト と

光の情報を増大して視界を確保する、魔物から目立たないで行動できる サーマイ

の2つから選ぶことにする。

このうち個人行動であれば サーマイ が適しているようだが、使ったことが無い上に消費MPも把握していない。第一レベルも低いので俺のMPも元から低いはず。

なら消去法で、当然使うのはこれしかない。

「大いなる神の光は我が道をも照らす。　ライト」

以前魔術を勉強したての頃に使った　ライト　の呪文とは格段に光量と持続時間の違うその効果に目を見張る。

魔法使いのクラスを持っているかいないかではここまで差があるのか。

幼女神様、さまである。

照らし出された通路の奥には、丁度階段状の窪んだ部分に何匹か一緒にまとまっているスライムの上部が見える。

もしあの部分に灯り無しで足を踏み入れていたら、死ぬまではいかないにしてもそれなりのめにはあっていただろう。

さーて、初対戦といきますか。

第10話 逃亡

きつい。ちょっと考えればわかると思うが、スライム相手に刃物を使わずに素手で格闘とかなんて無理ゲー。

こいつら動いているときは、髭剃り用ジェルみたいな柔らかい雰囲気があるのに、攻撃あてた感触はまるで自動車のゴムタイヤだ。

敵の背が低いので主に蹴りで攻撃するのだが、レベルの低い俺では攻撃が通りにくい。

魔法でやればいいのだが、MP温存を意識して最初は格闘で挑んでみた。

で、何故効率の悪い格闘での攻撃を続けているのかというところ——
——気持ちいいのだ、身体がスムーズに動くところとか、でかい打撃音とかが。

「格闘家のクラスすっげえ」

蹴りを一度放つごとに、身体が新しい動きを見せてくれる。

軽く力を入れる度に、身体のアチこちの筋肉が喜びで悲鳴をあげる。

動作の一瞬一瞬に、最も適した姿勢と力の入れ具合が自然と理解で

きてしまい、その通りに身体を動かすと、まるで体中で筋肉の喜びが乱反射しているような感覚に浸れる。

最初はただ足裏で蹴るだけだったのが、段々と踵や足刀、つま先などでの攻撃が巧みに入り乱れ、決定打は得られないものの、何度も手数、いや足数を稼いでいるうちに慣れたせいか蹴りの威力が徐々にあがってきている気がする。

そして攻撃をしている中でわずかに手ごたえが違う部分があるのを見切り、その部分を集中的に蹴ることにする。

「うおおおおっ、パクリ拳っ、東斗百裂脚」

脚が百本もあるようにすら見えると思いたい速度で足技を連続で繰り出す。

踵で大きく抉り、足刀でかき分け、つま先で深く抉る。何度もそのコンボを繰り出しているうちにスライムの弾力に負けずに周りの邪魔な部分が押しのけられて、核が浮き出てくる。

最後につま先で大きく抉り、核の下にまで達した右足の親指をデコピンのような感じで跳ね上げて核を弾き出し、すかさずキャッチする。

「ふう……いっちゃあがりっ」と

ちょっと大きめのビー玉みたいな核を確認するように眺め直し、

そして一息ついた後に俺はようやく後ろが騒がしいことに気付く。

「すんげー、なんだよあの技」

「スライムを蹴りで倒してる……」

「百裂脚だってよ。かつけー」

「でも俺らと効率変わらないな」

「だね」

……… かつ、悲しい………

あの広場から近い場所で、少々？五月蠅くし過ぎたようだ。

短慮だった自分の行動を少し反省して、先を急ぐことにする。

幸いまわりのスライムは鈍足なので、踏み抜いたりしなければ通行の邪魔はされない。

不自然にならない程度の速度でがきんちよらから逃げるように奥へと移動する。

男ってこういう時はバレバレであっても格好を取り繕おうとするもんだよね。どうでもいいことだけど。

移動中も適当に1匹で居るスライムを見繕いながら戦い、1階の端っこ、階段のある小さな部屋にたどり着く頃には、核の数は大体30個程になった。

「で、なんでふたつ階段があるんだ？」

ひとつは緩やかな階段。

もうひとつは底が見えないほど深い階段。

多分だがこの深い階段は熟練者用の階層のショートカットではないかとあたりをつける。

俺が選択するとすれば緩やかな階段の方なのだろうが、そもそもいく必要があるのかということも考えるべきなのだが。

以前に聞いたことがある話からすると、今の所持核は大体1個が100ルトぐらいだと考えて3000ルト程度である。

これだと数回食事をするのは余裕だが、宿代にはかなり辛い。

このままここでスライム虐めを繰り返すのもありだが、目標として余裕の出来る金額、1万ルト以上を目指すとなると、倒すのも探すのも時間がかかるスライムだと難しい。

「うむ、行こう！」

俺はいそいそと下へと続く階段に脚を踏み入れた。

第11話 技名

モソモソ、モソモソ。

今俺の目の前でモソモソとしているコイツ。

こいつは確かラージバニー。俺の村周辺でも見かける雑魚魔物の一種である。

しかし雑魚とは言っても、ウサギというには大きすぎる体躯を使った強烈な体当たりは子供であれば動けなくなるほどのダメージになるだろうし、そのまま倒れていると大きな歯で食いつかれるというあまりよろしくない攻撃をしてくる多少厄介な魔物である。

1階でスライム虐めをしていたガキンちよらには少しきつそうな相手。

1匹であればなんとかなるんだろうが、一見安全無害そうないつらはゲームでいうリンクモンスター。

必ず5匹程度の集団で行動をし、わずかでも攻撃の意思を見せた者には集団で攻撃をしてくる、リンクモンスターどころかリンチモンスターだろ！と思わず突っ込みたくなる習性を持っている。

なのでただ眺めているだけなら比較的安全なのだが、いざ手を出すとなると勇気が必要であつたりする魔物なのである。

俺も例に漏れず、さてどうしようかと攻撃を躊躇していたのだが、既にスライムでウォーミングアップされた足技で、まず2匹を目安に即効で蹴り抜いて、後はなんとかやりぬくという即興の作戦をたてて足を踏み出した。

「飛連脚！」

本当は技名など叫ぶ必要はないのだが、今回は景気付けで。

もっとも叫んだのも既に飛び込んで2匹を足蹴にしたその瞬間を見切ってた。

流石に、当てる前に叫んで、見事に避けられるお約束は自重した。

それでも攻撃前に叫ぶことによって相手が一瞬ビクツと行動不能になる効果も期待できるから、タイミングさえ見誤らなければ攻撃前に叫ぶのも悪くはないかもしれない。

ちなみに今回の飛連脚、一匹は右足つま先での飛び蹴り。もう一匹は左足踵での打ち下ろしに近い蹴りを同時に行う、両方を組み合わせた技である。

日本人だった頃や、格闘家のクラスを得る前の俺ならば絶対に無理に近いような技だが、やはり今の俺ならば楽に出来るようで、空中での両足の軌道も体重移動も、そして着地もまるでカンフー映画でも見ているかのように華麗に決まった。

「おっと」

着地と同時に他の3匹のラージバニーが足をめがけて突撃してくるのを、すかさず上空におおげさに飛んでかわす。

そうすると向かってきたラージバニーへと下に蹴りを入れるだけで倒せる理想的な状態になっていることに気付き、そのまま体重をかけた蹴りで2匹を素早く踏み抜く。

更にもう一度飛んで最後の1匹をサッカーボールキックで蹴り倒す。

1階のスライムとは違い、ラージバニーの方は体重をかけた蹴りで簡単に一撃でケリをつけられた。

「こいつは旨いな。相性がいいってヤツかね」

倒れたラージバニーらの核をつま先蹴りでもぎ取りながら、そうこちる。

「なんか楽しいわ、これ」

飛んでは蹴って、飛んでは蹴ってを繰り返す。

あれからひたすらジャンプアンドキックだけでラージバニーを倒しまくった。

核の数は既に二百を超えるだろう。

ポケットに入りきらないので上着を脱いで風呂敷のように包んでいるが、少しみっともない感じがする。

「いったん帰るとするか。換金や宿の手配に時間がかかると野宿になるからな」

目の前に広がる15匹ほどのラージバニーの遺体を眺めながら、そう呟いて1階の階段へと足を繰り出した。

第12話 職員

俺は今冒険者ギルドの目の前に居る。

ギルドの外観は——それっぽくないというか、酒場みたいになつていて入ったら全員に睨まれるような感じかと思つたら、普通の商館みたいだった。

改めて思えば、さっきの子供たちでも利用している場所なのだから、そこまで無法なわけもないかと納得しつつ、少し緊張しながらも扉を開けて中に入る。

入り口近くの受付のような場所に居た、年配の柔らかい感じのおばさんに声をかけてみた。

「えーっとすいません、魔物の核の買取ってどこでしょうか？」

「それでしたらここの突き当たりの部屋の中でやってますよ。ここのギルドカードはお持ちですか？」

「いえ、持っていないです」

「なら作ってからの方がいいですよ。買い取り額が少量ですがアップしますよ。簡単ですから手続きを済ませてしまいいましょか」

「じゃあお願いします」

手元の魔道具らしきものをちよいちよいと操作する職員さん。随分手馴れた様子である。

「では、ここに指を入れて5秒ほどお待ちください」

言われたとおりにゴツイ魔道具に指を入れる。少々不安な感じもしたが特に何も無く5秒が過ぎた。

「もういいですよ。これで登録は終了です」

「なんか簡単ですね」

ニコッと笑う職員さん。若い頃は美人だったろうな～と思わせる微笑に和んだ気分になせられる。

「これが身分の証明用のカードで、注意事項などはこの小冊子に全て書いてあります。冊子は貸与なので後日読み終わったらはやめに返してくださいね」

「あ、はい」

思ったよりもはやくスムーズに登録が完了した。

とはいえ、宿の手配もしなければいけない俺はゆっくりもしてられない。

買い取り用の部屋らしいところに足早に歩き、無心でドアをあける。部屋の中には3つほど窓口があり、人がいるのはそのうちのひとつ、40ぐらいのおじさんの窓口だけだ。

「あのー、魔物の核の買取お願いしますす」

「はいよ、じゃあこの容器に入れてくれ」

俺は風呂敷もどきの上着のきつくしまっていた結び目をいそいそと解いて、貰った指定の容器の中にばらっと広げた。

「お、結構取ってきたね。この大きさだと殆どラージバーか。大変だったろ？」

「ははは、まあそこまでは。一応クラス持ちなんで」

「ほお、クラスって戦闘系か」

「そりゃそうですよ、村人のクラスは普通はクラス持ちとは言いませんから」

「はっは、確かにそうだ」

おじさんは言葉を交わしながらも手は休めない。

おお、職人だ。いや、職員か。

受付の婦人もそうだがここの職員さんは対応がはやくて、あたりも柔らかい感じがいいな。

俺の村の奴らとはえらい違うな」と和みつつ――まあ人は皆、利害関係のしがらみで生きてるからほんのちよつと歯車が掛け違えばこの先どうなるかは分からないな。

人は素晴らしく、そして怖い。

そんなことを考えていると精算終了の声をかけられる。

「スライム核が1個100ルトの32個、ラージバニー核が1個200ルトの237個で合計が50600ルトだ。どうする？ カードに貯めておくか？」

「2万と端数だけ現金で貰えますか。 後はカードで」

「おうよ。少し待ってな」

おじさんは出したカードを受け取りつつ、カチャカチャと魔道具を操作している。

大して待たされずにカードと現金が差し出される。

「ほら。またこいよ」

「どうも」

そして軽く手を振りながら部屋を後にした。

さて、後は宿の手配か。

第13話 恐怖

ギルドの受付の婦人に相談をして紹介された宿に来てみた。

なんでも妹さん夫婦がやっている宿屋らしい。

パステルピンク色をふんだんに使用したちょっと少女趣味な外観には引いたがさっそく中へと入る。

前にいる女性が妹さんだろうか。

ちよっただけ顔立ちが似ている気がする。

「こんにちわ。泊まりたいんですけど部屋空いてますか？」

「いらっしやい。シングルだったらまだ空いてるわよ。一泊4000ルトで朝夕食事がついて5000ルトになるわ」

「ああ、よかった。実はギルドの受付の女性に紹介されてきたんですけど」

「あら、姉さんの紹介？　なら一泊3500ルトでいいわよ。食事はまけられないから付けると4500ルトね」

「予定がまだわからないんですが、とりあえず一泊食事つきでお願い

います！」

「まあ、元気がいいわね。分かったわ。食事は部屋まで届けるけど、居ない時には下げてしまうから注意してね。声をかけてくれれば少し遅れても食べられるけど、あまり遅くなってから言われてもたいした物は出せないから勘弁してね」

「はい」

よかった。これで一応は当面の危機的状況は乗り切った。

しかし考えてみると、幼女神様ひどいよ。

いきなりダンジョン近くに飛ばしてくれちゃって、どうやって帰ればいいのかやら。

ここからあの村まで帰るのには乗り物を使い継いで帰れるのか……疑問すぎる。

「おまたせ。これがおつりね。それとリプの間の鍵を渡しておくわね。部屋は階段を上がってすぐのところよ」

「わかりました」

ちなみにリプというのはこちらで人気の高いフルーツの一種だ。それが部屋の名前に使われているのだ。うん、嫌な予感がする。

疑心暗鬼にとらわれつつも、俺はあてがわれた部屋へと足を運んだ。

「うつつ、これは」

窓枠がピンク色だし。

クッションがハート型だし。

小物がいちいち可愛いし。

これ女性用の部屋じゃないか？

清潔感が高いんだけどね！

部屋を間違えたというわけではないんだろう。多分全部がこんな感じの部屋なんだろうな。

何故何故、ダンジョン探索で魔物を殺しまくって帰ってくる宿がこんなにファンシーなんだ。

雰囲気格格差が激しすぎて、頭の中がハレーションを起こしそうである。

まああくまでちょこっと自分の中で整理がつきにくかっただけで、これでも適応性は高い方だと思ってるから、ちよつと苦笑して言うてみたかったんだけどね。

「さて、食事までは時間があるし、かといって横になるにも寝てし

まうと食事の時に起きれるのが心配。なにで時間潰そう……?」

ボスッとクッションに腰を落としてもたれかかりつつ、そんなことを呟く。

（そういえばここっでお湯とかのサービスあるのかな。少しダンジョンで汗をかいたから綺麗にしてみたいけど）

思い立ったが吉日。

さっそくおかみさんのところに聞きに行く。

「まあ。私としたことが言い忘れていたわね。なんとここにはシャワーがあるのよ。男女用に2部屋あるからいつでも入っていいわよ。でも女性用に入ったら怖い目にあうから注意してね、うふふ」

怖い怖い、おかみさん、眼が怖すぎるよ。

第14話 子猫

シャワー室もまたファンシーな雰囲気のものだったが、清潔な感じは素晴らしかったし、設備的にこういうのが揃ってること事体が珍しく、俺にとってはここに泊まれたのは非常にラッキーであると言えるだろう。

夕食も幼女神様の恵みの食料品よりは一段ランクが低いけど、それでも村で食べていたものとは雲泥の差で凄く美味しかった。これが毎日でもいいくらいだ。

色々あった一日だったんで、食事の後はすぐにベッドで横になり睡魔に襲われて抵抗も出来ずに眠りについたわけだが。

で、目を覚ましたら何故か今、俺は子猫を抱いている。

女性を言いあらわした 子猫ちゃん のほうではなく、

本当の毛むくじやらの——いや、ふわふわで無駄にありえないほど可愛い感じの子猫様である。

「どこからきたんだい。この子猫さまは」

鼻の頭をつんと触れるように軽く押してやりながら、返事など来るわけも無い問いをぶつける。

「み〜、みう〜」

こういうのを鈴が転がすような声と言っのだろうか。

「よしよし、おー、可愛いな〜。ここの飼猫かな？」

「お兄ちゃん。お腹減った!」

「う……あ……?」

「ご飯、ご飯」

「子猫が喋った! じゃなくて幼女神様が子猫!」

「お腹減ったの」

「って、何言ってるんですか。昨日はあれからどんだけ酷い目にあったことやら」

「お兄ちゃん、酷い目にあつたの?」

「う……いや、よく考えるとそれほど酷くもない気もしないでも無いかもしれない様な」

「じゃあ、ごは〜ん〜、食べにいきますよ〜」

「仕方ないですね。でもその姿はどうしましょうか」

「人の姿の方がいいの？」

「……幼女神様の人間バージンは可愛すぎますからね。この街にいる時は変な人たちに目を付けられないように猫のままの方がよい気がします」

「みゃ〜ん」

「それと念話は出来ますか？ 自分は出来ませんが幼女神様の力でなんとかなるのかな」

《これでどう？ 聞こえてる、お兄ちゃん？》

《ばっちりで、聞こえてますよ。そちらはどうですか？》

《こつちもばっちりだよ。早く早く。ご飯食べに行こうよ》

《この宿は朝食もついているんですよ。運んできてくれるはずですからそれを食べてからにしましょう。昨日も食べましたが結構美味しかったですよ》

《わかった、はやく来ないかな》

《あ。でも幼女神様が猫の姿でも一緒に居るのはまずいかなあ。動物とかは食事を扱うところでは嫌われるから》

《わたし猫じゃないもん！》

《わかってますけどね。とりあえず飼っている猫がついて来ちゃったと言う理由で宿のおかみさんのところに断ってきましょう》

《ふにゅ》

幼女神様子猫バージョンを懷に抱えて、おかみさんの所に顔を出す。

「あゝ、この…」

「！ きゃああああああ！ 可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い！」

「……えっと」

「なっ、なに、この子！ 君の猫なの？ いや〜ん。なんて可愛い子猫なのおお」

《ちょっ、おかみさんテンション高すぎ！》

《くねくねしてる》

第15話 冷静

子猫様の件はうやむやのうちに、適当に宿に泊めても問題ないように話が運んだ。

食費も追加は無しだという。むしろ人間様より豪華かもしれないものまで出してもらって、なおかつおかみさんがこちらにお金を払おうとするかのような勢いだ。

子猫様のラックの数値ハンパねえ！。

これが間近で感じるヒエラルキーの味かと俺の繊細なハートが少し傷ついたものだ。

それはともかく今日の予定だが。

昨日に引き続きダンジョンにいくのは決定として、その前に――

魔物の核を入れる袋を道具屋で買う必要がある。これは重要だ。

それと怪我をしたとき用の回復ポーションを道具屋で買う必要もある。これも重要だ。

それに道具屋のおねーさんの名前を聞きだす必要もある。これが一番重要だ。

なんと！全部必須の事項は道具屋関係ではないか。

偶然だな。いやはやなんとも。

というわけで、子猫様を肩にのっけてレッツゴー！

《ごぉごぉ》

やってきました、セーラ道具店。

昨日は文無しで躊躇して入れなかった店内へと、ドアチャイムを力ランコロンと軽快に慣らして身を入れる。

「あら、昨日の子ね。いらっしやい。可愛い猫ちゃんを連れて今日は何の用かしら？」

（おおお、なんということだ。声まで魂を奪われるほど綺麗なんだ。しかも近くで見るとますます美しい。しかも俺を覚えてくれていたとは。う……き、緊張するなあ……）

「えと、今日は、魔物の核を入れる袋を買いに来ました」

「核用の袋ね。安いものが500ルトで少し高い丈夫なものが2500ルトよ。お勧めは長く使うつもりなら高い方ね」

「じゃあ、えっと、高い方お願いします」

「み〜、みい〜」

「うふふ、わかったわ。他には何か欲しいものはないの?」

（ああ、微笑がなんて魅力的な——もう俺は駄目かもしれない……恋に堕ちてしまいそうだ）

「んと………回復ポーションを、お、お願いします………」

「初心者用でよいのよね? 1個1000ルトだけれどいくつ必要かしら」

「3つ………いえ、5つ………」

「今のところ全部で7500ルトになるわ。これで全部でいいのかな?」

「は……い」

（オイオイ! 名前を聞くんじゃないか、俺って馬鹿ばかああ、へたれめええええええ）

おずおずと手持ちのルトを差し出す俺。

「はい、じゃあこれ。ポーションは袋の中に入れておいたから割らないように注意するのよ?」

「はい、あ、ありがとうございます！」

最後にお釣りを貰って――

「ふふ、またきてね」と言われたと同時に手をぎゅっと下から包まれる様に握られる。

その瞬間、俺の全身の血が逆流する。

（や、柔らかくてあったかいぞおおおおおお）

しかし逆にこのことが幸いして俺は冷静になった、いや、ようやく本来の自分を取り戻せたというべきか。

自慢の灰色の脳細胞がフル回転して警告を鳴らす。

俺のいままでの不幸から考えて――「こんなウマイことがおきるわけがない。

そつだ――これは何かの罠かもしれない。

あの村の皆が仕組んで俺を騙そうとしてるんだっ！

そうか、そうだったんだ！

冷静にイイイ！

落ち着いてエエエエ！

考えて見ればアアアアアアアア！

なーんで気がつかなかったあーーっと思っぐらいつ！

簡単なっ！――

――事だっ！

こんなにもっ、優しくて！魅力的で！美しい人が！

――女性――のわけがないじゃないか！

ということとは、この人は――男――

――男――男――男

——あれがついている——男

「うっ」

「うん？」

「うわああああああ——————」！

「ど、どうしたの君！」

俺は道具屋を飛び出して走り出した。

子猫様と袋を抱え、ただひたすらに。

第16話 同属

頑張りました。

俺は頑張ったんだ。

—— 本当に無駄な方向に ——

何が冷静だ！

酒に酔って真っ赤っかな顔をしながら「よっれない、おれはよっ
れまーせん」とか言う酔っ払いと同じじゃないか ——

えーっと、あれです、あれ、結局は単に恥ずかしくて混乱して暴走
したわけですよ。うん。

そう、俺も男だから、綺麗なお姉さんは大好きですよ？

でも流石に顔で惚れたりとか、笑いかけられただけでは惚れません
よ。

惚れた腫れたやはちよい悪ノリしただけなんですつてば。

やっぱ人は中身ですから。

ですからそれほどさっきの醜態も気にしてません。

まっ、細かいことはもう置いておくことにして。

いや、もう許して！

……問題は次にあの道具屋には行きづらいつてことぐらいですし。

そんなことをだらだらーっと考えつつ、既に八つ当たり気味にラージバニーを300匹ほど葬っていたりする。

こいつらも八つ当たりで倒されるとはなんと不憫な……………

「飛燕連脚！」

ふっ。今はもう使ってる技は 飛連脚 ではない。 飛燕連脚 だ。

そう、技がバージョンアップしたんです！

もとから我流だから創作したとも言えるけど。

何故 燕 の一文字が付いているかと言うと、かの巖流島の決闘で有名な燕返しをモチーフにしたから。

ここで勘のいい人ならもう解るだろう。

この技は飛連脚の技を繰り出した後に両脚を鉄のように交差させて、その勢いで再度蹴りを繰り出すのだ。

ただし体重移動がおそろしく難しくて、昨日は技のイメージはあったのだが出来なかった。

鑑定してみないとわからないが、狩りまくってレベルもあがっているのが今日出来るようになった原因であろうかと予想。

もうね、バニーなんて瞬殺すぎて。

倒すより核を集める方が時間と手間がかかってしんどい状態。

んで、幼女神様は只今俺の腕の中で子猫状態でおねんね中。

朝食を食べた後から口数が減ってたと思ったら、ずっと眠たがってたらしい。

まあ女神様といえど子供であるからして、やることといえば食う寝る遊ぶの三つで要約は足りるようだ。

しかし激しく動かさないよう注意してはいるとしても、よくまあこれほどの戦闘状態で眠れるもんだね。

お昼時だから幼女神様が眼が覚めていたら何か食べに行こうと思ってたんだけど、これはもう狩りを続けてもいいかもしれない。

ここの次のランクの敵の情報ももう手に入れているし。

ギルドで借りてる冊子の初心者用のダンジョン解説によると、この次の階のパープルウルフは一応ウルフの名前はついているが、実際にはその最底辺の亜種。

大型犬程度の強さということだ。

性質は元の世界でのハイエナのイメージで、気性が荒いというよりはとにかく色々汚い。個別行動を好むのだが孤高じゃなくて協調性がないだけ。縄張り争いで喧嘩が絶えなかったり、他の個体の食料を奪いあったり、強い敵にあうと素早く逃げて、PTなどでいくと必ず後衛をターゲットにする、細かいことはやってみないとわからないがそんな感じらしい。

……これは俺の大嫌いな性格をしている敵だな。

同属嫌悪じゃないよ？

ある意味、好機。

まだ少し心の奥でくすぶってる恥ずかしさの憂さ晴らしの！

ふっふっふ。徹底的に駆逐してやろうじゃないか。まってるよゴミども。

道を少し戻って先ほど通ったときにあったそれらしい岩陰に階段を確認し——ツカツカと中ほどまで足を進めると、もう既に三階の地面が階段下に覗き見え、更にライトの魔法の光で気付いたのかこちらを不機嫌そうな顔で睨んでいるくすんだ紫色の犬みたい

な魔物も見えた。

（今度の標的はアレか。なるほどそれっぽい顔つきをしている）

階段を飛び抜かすような勢いで一直線に駆け下りた俺は、その勢いのままにパープルウルフに飛び蹴りを食らわした。

第17話 狙撃

「どうもやりにくいなあ……まあ、ラージバニーに比べとつ、だがっ！」

パープルウルフはラージバニーに比べ、見かける数は少し多い程度で、

倒すのにも相手が逃げなければ一撃。

走り回って速度をつけて、標的を見つけたらすかさず逃げる前に蹴りを入れて倒す。

核はバニーよりははずしやすい部分にあるので楽。

と、ただそれだけなのだが。

「こいつら逃げ足速すぎだろう……」

普通はまあこの手の動物に人間が走る速度でかなうわけがないんだから仕方ないけど、

今の俺だとそれなりに併走できるほどのスピードが出せる。

でもそれでもトドメをさせるのは2匹に1匹ほど。

倒せた方の敵はいいとしても、倒せなかった敵のほうの時間をかけて追い回してそれでも逃げられた時の虚無感はなんともいいがたいね。

これだと綺麗に倒せるラージバニーに比べると、ウルフ相手は歯がゆくてスツキリしないなーなどと言わざるをえない。

それと特に気分悪いのは、このまとわりつく視線――

通路の影とか、ライトの光が届かないギリギリの領域とかで、こちらを観察するような視線をいくつも感じる。

こいつら行動は単独なのに、獲物を取り合う汚さがあるから、擬似的に集団行動の利点も得られるんだよな。

この、犬っぽいのに群れで追い詰められるって感覚は――暗闇に犬の眼がいくつも光って見える状態ってのは、前世の日本人の祖先の記憶なのか本能的にいやーな感じが付きまとう。

バニーはノンアクティブだから群れを倒したら一息つけたが、パープルウルフはアクティブで狩場で休みにくいのも気に食わない。

「はあ。やっぱ、ラージバニー狩りに戻ろっかね」

軽く地面を蹴って小石がコロコロと転がる様を見て、そう呟く。

(ん……)

インスピレーションに導かれるままにその小石を拾い、手の中で遊ぶ。

子供のたわいない遊戯のように、曲げた人差し指に小石を挟んで親指で弾いたその飛礫は――遊戯とはとてもいえない速度で土壁へとめり込んだ。

「……………指弾か、コレいけるかな？」

ビシッと弾き出された小石がパープルウルフの尻に突き刺さる。

「キャン」と鳴きくずれる奴らを尻目に動きが取れにくくなったところを蹴りでトドメを指す。

あれから150匹程のパープルウルフを狩った。

狩り効率としては指弾を使い出してからはもうラージバーニーに並ぶ程度にはなっているはずだ。

小手先の技術を使わずに、全部勢いにまかせての蹴りでカタをつけられればもつとスツキリするだろうとも思えるが、この低威力中距離攻撃と言おうか、指弾という攻撃手段に慣れる練習だと思えばそれも気にならない。

やっていることはそれほど高度な技でもない。

しかし格闘家のクラスを得てから小さな動きひとつひとつがそれを重ねる度に洗練されていく。

才能が——ただの単調な狩りを高密度の訓練へと変容するのだ。

なんの変哲も無い石ころを指で弾くという動作を繰り返すだけで、
どんどんと命中率と威力を上げる弾丸と呼べるものに変わっていく。

しかしあれだ、こうしてきやつらめの後ろから指弾を叩き込むとで
すね——

——ときどきカマを掘ってしまうのはご愛嬌で。

ふふふ。

いえ、狙ってませんよ？

すべて偶然ですってば。

第18話 視線

クキツ、クキツと。

「いや、見事に穴が開いちゃったな。あれだけ酷使すりや当然なんだけどさ」

革靴のつま先の穴から見事にのぞいた足の親指を、曲げたり伸ばしたりを繰り返しながら眺める。

なーんかつま先が敏感になってきたな、格闘家って感覚も鋭敏になるのか、っと思つてたらコレだよ！

幼女神様がお起きになられたのと、俺の愛用の靴が壊れてしまったのが同時に発生してしまったので、まだオヤツ時前ぐらいだが適当に狩りを中断して街へと繰り出すことにする。

例のごとく、幼女様が「ご飯」とか「お腹減った」とか五月蠅いからだ。

で、帰路にあの1階の広間を通ったときに、何やら子供たちが揉めている場面に遭遇した。

感じからすると新しくここで狩ろうとする子供と、今まで狩っていた子供の縄張り争いのようだ。

（まったく……こんな小さなうちから随分と醜いもんだ。スライムぐらい皆で仲良く肩並べて狩れよ、ウツゼエエー……）

と内心で毒を吐きつつ、

やっぱりあそこで狩らなかったのは正解だったなと思いながら足早に立ち去った。

《さてつと、幼女神様。ガッツリ食べるものとデザート的な甘いもの。どっちが食べたいですか？》

《うーんとね、両方！》

《………ですよねーっやっぱり》

《うん！》

《どこかのお店に入ってもいいんですが、猫の姿だと食べにくいでしょう。ならば商店街の方にもいって美味しいものを物色でもしましょうか》

《するの〜》

道行く人の歩く方向にも流れがあつて。

この時間を見るからに主婦というような買い物籠を持って出歩く人たちがあつた一定の方向に多く流れていつている。

それを辿れば当然――

《ここがこの街で一番の大通りっぽいですよ?》

《あれ!》

この大通りについてすぐに、気の早い幼女神様がまつさきに欲しがつたのは3、4人ほど人が並んでいるところで売っている焼肉乗せパンである。

《では並んでみましょうか》

俺としては並んで買うようなのはいつになつたら順番になるんだろ
うとマイナスな方向に考えてしまふのであまり好きではないのだが。
なにしろ幼女神様の仰せでもあるので、たかだか数人程度なら気に
するほどでもないので素直にさつさと並んだ。

いやさ、日本に居たときにスーパーとかでこのレジが早く終わる
かな?と思つて、熱心に並ぶところを選んだ時ほど、何故か一番待
たされるとかいう経験が多いのがトラウマになつてゐるわけじゃない
よ?

ほんとホント。

ただ並んでいるのも暇なのでついでに周りの商店も見回してみる。

あの宿の部屋の名前にもなってる果物のリプやら、神殿で最初に食べたリンゴもどきのティーアコも売っている。

いくつか買っていて、適当に摘むかな

つとそう言えば一応聞いておこう。

《えっと、幼女神様はフルーツは好きですか？》

《うん！》

《じゃあ、お肉は好きですか？》

《うん！》

《では、おサカナは好きですか？》

《うん！》

《さいごに、お野菜も好きですか？》

《うん！》

オッケー、幼女神様の嗜好は全て把握した。

既に聞くのも愚問だな！

「何だろ？」

さつきから妙に視線を感じる。

幼女神様がそれはそれは非常にひじょうに美味しそうに――もゆもゆと表現しにくい音を立てながら色々なものを俺の手渡しで食べている姿は、既に周りの主婦や女子らの生暖かい視線を集めまくってはいるのだが。

俺が気にしているのはそれとは別。

最初はパープルウルフの時に感じたような嫌なものではないので無視をしていたのだけど。

こちらもヤツラと同じく複数の視線なので気にかかってきたのだ。

この感じは……

敵意のある視線でもなく、殺意の乗った視線でもない。

何かこう、深い悲しみの混じった諦めのような感情がまわりつい

た視線

「そう、これはまるで少し前までの俺のような」

第18話 視線（後書き）

年越し、そして新年です。

準備に忙しくて更新しにくいです！

ということですが今日はこの2話でおしまいです。
ではまた来年に！

第19話 薄闇

「あのー、夜って出歩いてても大丈夫ですか？」

「うーん。あなたまさか夜にダンジョンに行く気なの？ 危ないから止めときなさいって」

「ちょっと夜に行かなくちゃならない事情が出来てしまっ……」

「……しょうがないわねー、無茶しちゃ駄目よ？ ほら、裏口の鍵を預けておくわ」

「すみません、無理言っ……」

今日も昨日の宿に泊まることにしたのだが、

夜に出歩かなければならない用事が出来た為におかみさんへと交渉をした次第である。

とりあえずの了承を貰ったので、準備万端。

夕飯を食べ終わってから眠れば夜には起きれるだろう。

ちなみに穴が開いた靴は修理屋で革の切れ端を付けて貰って補修さ

れている。

これでしばらくはもつと思う。

《やっぱ寒いな》

《どこいくの》

《うん、ちょっとね》

起きたのは丁度丑三つ時ぐらい。

まあ簡単に言い直せば午前2〜3時つてとこだ。

俺の予想が正しければ今の時間が最盛期のはず。

進む先の道は薄暗い。

ライト を灯してもいいんだが目立つのはご免だ。

夜なので治安が心配ではあるが、今の俺ならそう問題は無い。

一人で歩いていれば、数人に襲われればまあ助からないだろうが。

だが大丈夫だ。

何故ならここではダンジョンがあるから。

そもそも今の俺を襲って倒せる程の身体能力的に強い人間は強盗をするほど金には困らないというわけだ。

夜中に人を探して襲って小銭稼ぎよりも、ダンジョンでいくらでもいる魔物を倒す方が効率が良いし。

第一に——人を襲うなら夜中の街よりもダンジョンの中ほど最適な場所は無いのだから。

チエイサー

主に素早く逃げやすい魔物などに小さな魔力を打ち込み、見失った場合などに追尾をする用途の比較的簡単な魔法のひとつである。

それを既に昼のうちにいくつか見繕ったやつらにかけてある。

（やっぱり集まってるよな）

追跡魔法の反応を確認しながら、深夜の街の中心へと歩を進める。

俺は今から嫌なものを見に行く——

——そして少なからず嫌なめにもあつたろう。

内心を反映したように足取りは重く、

それでも歩んだ先は、やはり見知っている建物の前であつた。

「はあー………、やっぱ………、だよなあ………」

白い石造りの建物。

いわずとしたダンジョン入り口である。

一応やる気のなさそうな門番も1人いる。

関わりになる気もないので無視して中へと入っていく。

薄暗い通路の突き当たりに見えるは、

昼に見たよりも更に薄暗くなりすぎた1階の入ってすぐの広間。

暗いのは当たり前だ、こんな夜までガンガンに灯してるわけがない

からな。

——使う人間が居るはずもないのに——

わずかに光るのは、昼間についていた魔灯の残りカスの魔力のせい。
そしてその暗さと反比例して、目の前に広がるは昼間よりも多くの
子供たちの影。影。影。

昼にここに居た面々とはまるで違う——

全員が生気の無い眼をして、何人もがゾンビのように時折出るスライムへと群がっている。

そう、こいつらは——

この街に初めてきて村人Aを演じてくれたおもしろいおっさん。

ギルド受付の丁寧な対応をしてくれる上品な婦人。

買取窓口の気さくな話しやすいおじさん。

少女趣味の宿のおかみさん。

女神様のよう微笑む道具屋の綺麗すぎるお姉さん。

そして、昼間にここに居た子供たち。

そんな 陽 に属する眩しく明るい世界に住む人たちに、

—— 居ないことにされている 陰の存在 ——

あの村での ——

—— 小さな女神様と出会う前の俺なんだ ——

第20話 暗闇

この場には本来居ないはずの、ひとつの異分子を見つめる多くの視線。

その見つめられている対象である、

俺は今たぶん、

傍から見ると非常に険しい顔をしてしまっているだろう。

何時から何時までかは知らないが、

おそらくあの昼間の子供、いや餓鬼どもらの居ない時間帯のみにこころを利用して弱者の群れ。

「ムカツク……」

苛立ってるのは、

昼間にいた餓鬼どもにか。

反抗も出来ないこの子供らにか。

それともなにもしないこの街の人間にか。

それとも、あの村での無力な自分を思い出すからか。

いつのまにか広間に居る子供たちはスライムに群がることを中断して――

全員が俺をおびえた眼でみつめていた。

（酷いもんだな……ろくな武器すら持つてる奴もない）

俺は苛立ったその心のままに、たまたま眼が合った小さな子供の前に無造作に歩み出る。

「亜人……」

服の端からのぞくその毛深い四肢はおそらく獣人系の種の証。

俺が遠慮もせずにくっきりと前に出て、手を伸ばしその身体に触れようとしたその時――

「下がって!」

その子を奪うようにひったくり、間に入ってかばう1人の姿。

他よりは少し年上らしいが、まだ子供らしい中性的な顔立ちに凛々しい目付きと流れるような眉。

ちっ、イケメンだな。

なるほど、——いるだろう——とは思ってたが、コイツがこの群れのまとめ役か。

そのイケメンガキが険しくこちらを睨んだまま、おもむろに懷から安物そうなボロいナイフを取り出してこちらに向ける。

「ジルっち！……！！！！！！」

「ジルねえ……………」

「だめっ！」

（なっ！……………ジルっちだとおおおおお）

傍らの巨乳っぱい少女がイケメンガキにすがりついてよりもよって
ジルっち と叫びやがった！

ジルっち だぜ、 ジルっち ！

あまりのインパクトについてカッとなって、その後一瞬何も見えない
聞こえない状態になっただぜ。

（俺だって、俺だってええーっ

——女の子から。。。つちとか、そんな嬉し恥ずかしな呼び方で貰いたいわあっ！）

決めた。こいつは殺す！

イメージの中でビシッと指を立ててそう宣言する。

《えゝ、殺すのゝ？》

《いやいや、ノリで殺しちゃいけませんって。言葉のアヤってものです》

決めといった筋書き通りに上書きしようか。

軌道修正、軌道修正。シリアスモードに戻りまあすゝ。

「こいつらの……………アタマはお前か？」

「ああ。格闘やろつが何の用だ……………」

「ふん、ヤツパ知ってたか」

だろうな。非力でツマハジキもので社会的な力を持たないガキには

——情報だけが命綱だしな——

俺は核用の袋に手を突っ込んでひとつを掴み出して、ずっと目の前に掲げ——そして落とす。

それはコロコロとガキの足元にまで転がっていった。

「なんのつもりだよ……」

「やるよ、拾え」

一瞬、驚いたような表情を見せて足元の核に眼を移したが、すぐに元の警戒した顔つきに戻り、俺を睨むイケメン。

当たり前だ。こんな小さなモノひとつじゃ、皆どころか自分ひとりも救えやしない。

こんな程度で喜ぶような薄い闇しか背負ってないなら、俺が手を差し伸べる資格も甲斐もない。

陽の光の元に戻った途端、他人事には眼もくれないアイツラ——
「この街の大勢の愚物と同じになったんじゃ、俺が手をかけてやる

価値すらも無いんだ。

俺はまたひとつ、核を取り出し放り投げる。

「お前らに――仕事をやろう」

今度はふたつを放り投げる。

「お前らの傷を治してやろう」――

今度はみつつを放り投げる。

「お前らに武器を作ってやろう」――

手掴みで持てるだけの核を放り投げる。

「お前らに戦い方を教えてやろう」――

「お前らに腹いっぱい食わせてやろう」――

次々、次々と俺は袋から核を掴み出しては放り投げる。

「だから――」

「俺に――」

「――俺にっ！――この街の全ての情報をよこせっっっ
！」

「みー、みいー」

俺がこの街の全てを手に入れるために。

第20話 暗闇（後書き）

今日も2話更新。

そしてこの後、新しい小説も投稿します。

定番のVRMMMOモノ。

こちらとは毛色も書き方も違いますが読んでくれると嬉しいです。

第21話 強欲

——ザ・土下座。

それは日本人の魂。

浮気をしたときに誤魔化したり、結婚記念日を忘れてたのを謝ったり、お小遣いの前借を頼んだりと、万能包丁のように色々と使える便利な業である。

それ故に——いにしえから男親から男の子へと、家伝として脈々と受け継がれる。

そしてその集大成が今ここに。

「幼女神様、どうか俺に治癒師と錬金術師と鍛冶師と細工師と商人と料理人と教師のクラスをお与えください！」

「えい！」

「ががががガガガががががががはっ！」

（ちよっ、これ今までで一番キツイんですけど。一気になんか頼む

んじゃなかったわ、もう遅いけど……)

あの後、500個にも及ぶ核が散らばったさまに呆然とする奴らを尻目に、

「こいつは手付けだ。次が欲しければ俺の泊まってるファンシーな宿屋に連絡をよこせ。仕事をくれてやる！」

と言ってダンジョン奥へと去っていった。

まあ連絡は来るだろうな、例え俺のあの態度に好感を抱いてないとしても。

なにしろ昔の俺自身と同じ立場なんだから、俺がそれを一番良く知っている。

昨日は、いや今日の朝になる前の夜だったが、やつらを見たときの苛立ちのままに芝居染みた行動をとってしまったが、結果的には良い流れになったと思っている。

あの場は強気な態度で接した方がよかった。

俺の中の苛立ちを、やつらがやつら自身への苛立ちと勘違いしてくれる。

それが俺にはもの凄く都合がよかった。

普段の俺のままで相対したら、

日本人の無駄に優しくヘタレな態度でいったら、

おそらく俺はあの子供らにですら、便利な道具扱いの、生物として下にランクづけされてしまうから。

何しろ俺は知ってるからな。

多くの日本のお父さんが娘に「お父さんの後のお風呂は嫌！」とか「お父さんの服と一緒に洗っちゃったからもう着れない」とか言われても、反抗も出来ない姿を。

で、嫁さんには「ウチのＡＴＭがオンボロな件について説明を求む」とか言われちゃうんだ。

これがギャグとして笑えないお父さんにはすまないが。

結局なところ、俺が欲しいのは矛盾だ。

物質的に豊かになれば心が貧しくなる。

慣れたものでは満足できなくなるからだ。

物質的に貧しくなれば心が豊かになる。

空腹は最高の調味料というわけだ。

優しくすればいずれつけあがるし、

厳しくし続けられれば素直になる。

矛盾する存在が欲しい。

少々の光に塗りつぶされない闇を持っている者。

多くの優しい男がそれを奴隷という闇に求める。

そして優しくしすぎて闇を忘れられ裏切られる。

ほしいほしいほしい。

苦しくなれば助けを求め、楽になれば手のひら返す、

流されるだけの石ころにやさしくしても意味が無い。

独り立ちできたら途端に疎遠になるような、

人間である努力をし続けない奴はいらないんだ。

ほしい。

信頼し過ぎても裏切らない友人が欲しい。

権力を与え過ぎても裏切らない部下が欲しい。

優しくし過ぎても裏切らない女性が欲しい。

欲しい。

幸せになれない人間が欲しい。

幸せに慣れない人間が。

俺は、

俺のように、

ココロに薄れない闇の釘が刺さってる、

人に裏切られまくって、それでも人であることをやめない奴が欲しい

い
ん
だ
よ。

第22話 証明

窓に小石ぶつけるとか、なんてベタな連絡方法を。

「子猫様は……寝てますね……」

置いていて、とりあえず表に出るか。

小さなガキに袖を掴まれ、「こっちこっち」と案内されて廃屋らしきボロすぎる建物へと連れられてきた。

（広さは結構大きいな、ガキどもが寝泊りしてるのかね。その辺の事情も全部聞きださないと）

「よう」

「……………」

思ったよりは荒れていない室内の、奥でたたずむフードをかぶったおそらく昨日のイケメンガキだと思われる人物に声をかける。

は傍目に見ても心の安らぐ癒しの雰囲気を感じられた。

ちなみに呪文は補佐、つまり発動と安定とMP消費を抑えるだけで、それそのものに効果はない。あくまで呪文無しで使える者の助けにしかない。

「治癒……術……そんな……」

ぷつ。驚いてやがる。そりゃそうだろうな。

治癒師のクラスなんて下手すりゃ1万人にひとりの割合でしか持っていない。

しかも見つかった時点でエリートコースに乗って、もう二度と平民の世界には戻ってこない。

神殿の権威を保つ虎の子として確保されるんだ。

「あつ……はやく!」

途端に俺の腕を取って外へと走り出すガキンちょ。

やれやれ、忙しいこった。

おいおい、俺が案内しろと言ったのは、死にそうな奴だぞ？

死人じゃねーーーーーーーーっ！と言いたくなるぐらい、私死んでますよな雰囲気醸し出してる人が目の前にいますよ。

傍らに居るのは例の巨乳ちゃん。なるほどこの子の母親ね。

父親の影はなさそうだなーっと。

ふむ、予想のひとつ、父親がダンジョンから戻ってこない、そして生活苦ってパターンか。

他にも、こいつらの境遇を色々予想はしていたが。

単純にストリートチルドレンの集まりとか、亜人で差別されて職に就けないとか。

というかさ、この親子の耳かわえええええ……………

猫耳というか、もうね、めっちゃちっさいの。めがっさ。ちょこんってついでるの！

外側が真っ黒で中が真っ白の猫耳が、子猫サイズでくっついてるわけ。

これは萌えますねーーーーーーーーー。

「お願いっ……」

おっと、脱線してたわ。気合入れていきますか。

「まかせろ——百の神の慈悲と千の眷属の業が我が手に宿る。
マイナーヒール」

第23話 連打

「百の神の慈悲と千の眷属の業が我が手に宿る。 マイナーヒール

」

「百の神の慈悲と千の眷属の業が我が手に宿る。 マイナーヒール

」

「百の神の慈悲と千の眷属の業が我が手に宿る。 マイナーヒール

」

小ヒール連打である。

MMOとかRPGとかだと燃費がいいから安定性重視で使ったりするんだけど。

きつい一撃食らった後にうまく入ればかなり助かるんだよな。

まさか現実で使うとは。

治癒師のクラスについてから、まああの頭数を狩ったのでレベルは上がってMPも増えているとは思ってたけど、もう10回はかけてるのに切れる様子はない。

MP上昇量などのステータス上昇量はクラスランク（村人FだったらFの部分）によるところが多いので、もしかして俺案外高めのランクなのか。治療師ってだけでも大事なのに高ランクとか実感わかないが……

幼女神様さまさまだな。

今回置いてきちゃったけど。

「もう顔色は大分良くなった。で、ちと聴きたいんだがこの症状はいつからなんだ？　今まで対処はどうしてた？」

巨乳もといチビ猫耳とイケメンは俺に対する態度を改めた！

さつきから俺へと向ける雰囲気に変化しているのだ。

治療師のネームバリューすげえ！　と言いたいけど、まあこういうのはその場のノリだ。

ガキはすぐ忘れて調子に乗り出すのは、がきんちょ相手に慣れてる人なら周知の事実だし油断はしない。

「えっと、おかーさん半年前ぐらいからご飯あんまり食べなくなつて。時々ポーションを使ってたけど、少し良くなって、またすぐ悪

くなつて……」

「つまり栄養すら取っていなかったと。ポーションも道具屋の一番安いポーションだろ？」

「うん。あ、はい……」

と言うことは、

栄養失調の気もあるが、

旦那さんが亡くなって生きる氣力を失っているとか？

おまけにお金も充分に稼げない生活に悲觀して、それが体調にまで反映してると。

他の要因の可能性もあるけど、ありうるな。

幸運なのは、見たところヒールで回復はしているってことだ。

これなら根本的な原因を改善するまで、その場しのぎは出来る。

漫画とかみたいにさくつと治るのも期待してたが、世の中そう上手くはいかないか。

心因性とかマイナーすぎるわ。パツと治せなくてパツとしねえ。

「今日のところはこれでいいだろう。それとだ……」

俺はおおげさにジロツとふたりを睨んで告げる。

「俺はしばらくは治療術が使えることを隠したい。だからこのことは口外無用だ。もし漏れたら俺との縁は無くなると思え」

ふたりとも必死に首を縦に振って肯定している。

どうも信用できないんだよな。

核用袋からまだ使っていなかったポーションを全て取り出し、

「また悪くなったらとりあえずこいつを使え。気休めにはなるはずだ」

ヒールもいいんだが出来るだけ目立ちたくは無い。

ならこいつらには出来る限り普通のポーションを使ってもらうほうがいいだろう。

俺が直接動くリスクも低くなる。

ああ、そうだ。

俺はまだ道具屋でポーションを5つしか買っていない。

なら今後はあそこで継続的に買って、それを横流しするのがよさそうだ。

これなら迷宮に入ってるのに殆どポーションを使わない不自然さも誤魔化せる。

いい案だ。

「さて——容体が危なそうな奴はまだいるのか？」

第24話 問答

「よう、買取だよな？」

「ええ、結構多いです」

俺はさもなんでもないうちに事前に考えていたセリフを口に出す。

「おいおい、随分多いな。全部パープルウルフか」

「最初は手間取ったけど、もう慣れました。コツ掴めば簡単ですよ」

「ほう……」

そう、俺はもうパープルウルフをほぼ手間要らずで倒せる。

走って蹴る。ただそれだけだ。

指弾すら使わない。

「しかし頑張ってるな。これで3日分ぐらいだろ。あまり無茶すん

な」

(……………半日分だよ)

パープルウルフの狩場は不人気で殆ど人がいない。

半人前がいけば群がるように逆に狩られるし、

狩れる実力のある人間だとウルフが寄ってこないというジレンマ狩場だからだ。

あんな狩場にこもる物好きは俺か馬鹿ぐらいだろう。

それと本当は二日分の核があるのだが、

今回は問題にならない程度の量を持ってきてある。

様子を見るためだ。

やはり話の感じから、全部をいつきに持ってくると問題が起こった気がする。

「なあ、坊主は格闘家だろ」

「ん………何でわかったんです?」

「まず装備が何もないじゃねえか」

「……まあ、確かにそうですね」

「感じから魔法使いつてこともあるが杖も持っていない、ローブも着てない。第一これだけの量を狩るにはMPが持たないはずだ。」

「……」

「しかしまさかパープルウルフに追いつけるわけもないし、どんな方法で狩ってんだ？」

（はあ、やっぱり本職だな。誤魔化しにくいわ……）

「あー、まあ、不意打ちみたいなものです」

（そう、逃げる前に蹴り倒してるんだけど……）

「ああ、別に詮索してるわけじゃねえんだよ。ギルドとしても期待のルーキーの情報ぐらいは知っておきたいからな。そんな深くは考えるな」

「うーん」

（これはあれですよ、Aランクだと特典がつくけど強制徴兵、Bランクだと何もなしっていうお約束の）

「ま、大抵は伸び悩んで鍛冶場で終わっちゃうんだけどな。坊主はそうならないように頑張れ」

「鍛冶場？」

「5階のこつた。1階の階段の底が深いほうに降りればわかるさ」

「そうですか……」

（ふーん、鍛冶場ねえ……）

第25話 魔道

俺は今、核——それも狩りすぎて買い取りに出にくいものを使って色々と計画を練っている。

実はギルドで核を買い取ってるのは、ボランティアとかサービスとかではなく。

これを使用して魔道具を動かすためだ。

例えば転移用魔法陣ポータルにも核が使用されている。

ギルドで買い取られた核は主に王都に輸出されているらしい。

そんなに大規模に何に使ってるんだろうな、とは思っただが。

それは今は置いておいて。

核と言うのは魔力の塊。

それも攻撃魔法というか瘴気となって歪んだもの。

魔物自体が歪んだ魔法で出来ているが故に、倒した後はいずれ霧の

ように消滅する。

核を残して。

既存の魔道具の中にはそれをセットして動くものがあるのだが、

実際に動かすには、魔力を清浄化してからでしか使えない。

当然のごとく、核を直接セットして魔力を補充する魔道具にはこの清浄変換回路というものが用いられているらしい。

それで魔道具屋でこの核を直接セットして使える魔灯が売っているのだが。

錬金術師や細工師のクラスを得てからそれなりにレベルはあげた。

そこでこの魔道具を手に入れて、分解解析して、仕組みを学ぶ予定だ。

ただ……

たけえ・・・20万するし。

まあ無駄遣いしなければすぐに買えるだろう。

分解して解析して研究して、そして何もわからなかったら20万が飛んでいく。

アハハ……飛んでいく、ヒラヒラと

ま、それは仕方ない。

んで、核を使った魔道具の作り方がわかれば複製して色んな魔道具の大量生産。

それを使って考えているのは、夜のダンジョンをあいつらの占有にすること。

昼じゃなく、陰の存在を集めて夜のダンジョンの世界を支配するってやつだ。

中二臭い話だけど。

今までは広場で昼間のガキどもがいない時間しか狩れなかったらしいが、

スライムに特化したような装備と灯りさえ用意できれば、案外簡単に広場以外でも狩れる筈。

装備も鍛冶師のクラスのスキルの手慣らし程度に作ってやればいい。

「うーうー」

「どうしたんですか？ 幼女神様」

「ん〜」

俺の膝の上で、人間バージョンで何やらごろごろしている。

今日は幼女モードというより幼児モードだ。

妙に甘えてくるのである。

服とかひっぱらないで〜

のびちゃうから〜

まあこんなゆっくりな時間も、たまにはいいか。

第26話 魔改

「うーん。高いっ！」

「こらこら。商売の邪魔しちゃだめでしょ」

ダンジョン街の片隅。

例の魔道具屋の前で俺はくだを巻いていた。道具屋ではなく。

「これを1ルトにまけてください……」

捨てられた子犬のようなつぶらな瞳をキラキラと輝かせて、俺としては控えめなお願いを店主のお姉さん（フードで顔はわからない）にしてみる。

あ、元の値段はちなみに100万ルトだ。あくまで元。

「1ルトだけならまけてもいいわよ？」

なんというかこのお姉さん、どことなく感じが良くて話しやすい。

「安い中古品とかはありません？」

「無いわねー」

「ガックシ」

そもそも魔道具は王都の魔道研究院での専売で、許可を得た店舗以外での販売は厳重に禁止されている。らしい。

中古も外装をかえれば簡単に新品になるらしいし。

新品と同じ値段で売れるのにわざわざ中古品と告げる必要はない。

技術隠蔽で専売。なんともまああからさまな。

だがそれはそれでよい。

技術は学んで、見て、盗んでこそ華！

店内でも一番目立つ正面真上の壁に、大きな魔道具特有の文様が描かれた剣が飾っており、俺はボーっとその剣に目を奪われる。

「魔剣かー」

「1500万ルトよ。買うの?」

……買えるわけがないじゃないですか。

しかしお姉さんは何故か尻尾を振るような、今にも買うのを期待してるような喜びの反応を見せてくる。

まあ確かにこれが売れば貴方はボロ儲けだとは思いますがね。

「何か、あなたは魔道具が欲しいというより、魔道具が純粹に好きって感じよね」

そりゃそーですよ。理系人間舐めたらいけません。

「魔道具の魔改造とか萌えるじゃないですか」

「魔改造って……なんとなく意味はわかるけど、不穏な響き。よいわ」

あんたのほうが不穏だよ。ミステリアスというより怪しいiiiiiiii
い雰囲気発散してるんだぜ。しってたかい?

「よし、おねえちゃん、ボクちゃんのこと気に入っちゃったわ。
この本を貸してあげる」

「本?」

手にしているのはすこし古ぼけた感じの、カバーに金の装飾が入った分厚い本だ。

「基礎魔道具概要、古典的な魔道具に関する名著よ。わたしが若いときに勉強のために使っていた本ね」

「おおー。魔道具に関する本って初めて見ました……」

「……それはそうよ。市販すらされていないんだから」

「へえ……」

魔道具関連本は市販品じゃない？

何か裏がありそうだな。

まあなんにせよ、貴重な本ってのはわかった。

大事に扱うとするか。

いや、ここはあくまで、使い倒す気で扱おう。

それが本当の意味での大事にするってことだから……

これも錬金術師や細工師クラスのお導き。

ありがたく運命を受け取ろう。うんうん。

ぴこーん！

主人公が 魔改造への招待 魔道具改造講座 を手に入れた！

第27話 駆引

「シッ！」

キングコブラのように上体を起こして、

ゆらゆらと攻撃のチャンスを狙う オロチピール の懷に無造作に飛び込む。

オロチは4階の魔物で大型の蛇系統の姿をしている。

咬まれると時々毒状態になるという嫌な敵だ。

だが、攻撃が来ることがほぼわかっているから対処はできる。

ボクシングで言うパーリングの応用、

ビンタのような感じで一回だけ攻撃を反らせれば後は簡単、

首に近い部分を掴みこんで締め上げ、胴体には体重を込めたキックを食らわしまくって終わり。

が、タイミングを見誤れば当然大打撃を受ける。

更に毒にかかる可能性もあるシビアな敵。

「パープルウルフよりも厄介だなー。リズム良く狩れないし」

この敵は攻撃態勢のときは足が動かないから攻撃範囲が狭い分、その攻撃は非常に鋭い。

その見極めに神経を使うので、パープルウルフの時のように狩場を縦横無尽に駆け巡ることは出来ない。

それにここにはたまに剣を使って狩りをしている人も居て、目立ちたくない、邪魔されたくない、見られたくない俺にはどうにも美味しくは無い狩場だ。

それと何故見た目剣士が多いのかというと、こいつらは剣で狩るのが比較的楽だからだ。

なにしろ交戦時は、オロチはまるで上に向かってまっすぐ立っている棒のようなもの。

攻撃時も結局は胴体ごとくるので、剣で立ち木を断つように振れば、迫り来るオロチの頭を妨害する形にもなる。

剣士からすればオロチの首が攻撃範囲に突っ込んでくるようなものだから、例えばアタマが迫ってきててもオタオタする必要も無いわけだ。

しかし剣士に良いことばかりでもなく、こいつらは鱗が硬い。

そこで、実力不足であるとうまく切れずに逆に競り負けて、咬まれた拳句全身に絡みつかれて締め上げられて命を失う。

一度だけ人が飲み込まれていくのを見たことがあるのだが筆舌に尽くしがたい光景だった。

そこまではいかにしてもこの街では冒険者が大金を稼ぐことでその関連する武器類も当然高くなり、研ぎなおしにもまたそれなりの金がかかる。

何事もそううまくはいかないということだ。

（パープルウルフは楽しんだけど、あいつらだけ狩っていると格闘というよりも蹴鞠に近くて。敵との交戦時のタイミングをとる、避けるという基本的な駆け引きの能力が育たないというか勘が鈍るといっか）

蹴りを叩き込みまくってぐったりとなったオロチの後頭部のふくらみ。

まるで咽喉仏のように盛り上がったそこをぐいと掴んで、身体能力任せでもぎりとりと、

中から艶やかな瑠璃色の球体があらわれる。

それを手馴れた感じで核用袋へとポイッと投げ入れ、次の獲物に移る。

敵はまばらだがそれなりに広い狩場で他の人との接触を避けながらちやくちやくと狩っていく。

これで50といったところか。

後100ほど狩っておしまいにするか。

そう言えば次は5階、買取のおっちゃんが言ってた鍛冶場とやらか。

第28話 交流

最近は俺の泊まっているファンシー宿屋のそばには常にあの子供らのひとりが待機している。

俺が迷宮から出たとき、帰ってきたとき、連絡をつけるとき等、密に交流が出来るようにしているからだ。

また買い物に出かけたりするときにはその子供に案内を頼んだりして一緒についてきてもらい、その際に色々と話し込んで情報を引き出す。

一緒に買い物をして小遣いとして核も渡したりする。

これらのせいで徐々にこの街の情報と、あいつらの顔ぶれを覚えていつている。

今は少しやつらとの付き合い方を変えた。

代表者であるイケメンやチビ猫耳巨乳には通常はきびしく、時に大胆に利益を与え。

他の小さい子供らには、それが少人数の場合は時々優しくと父親や兄がわりのように接し、

しかし人数が揃っているときには威厳を保つため怒るような口調を使う。

集団相手が一番暴走が恐ろしく、制御力が必要だからだ。

それに少人数の時の対応での、優しくした個々の相手の気の緩みを正すのにも役に立つ。

「ほんとにいいーのー？」

「ああ、買ってやったんだ。あたりまえだろう」

「ありがとう！」

こちらを振り返りつつもタタツとかけていく小さな女の子。

日中は日差しが強いので、ここだと帽子は結構必需品なのが、

この子の帽子があまりにもボロ過ぎたので洋服屋で安くてデザインの悪くないものを選んで渡したのだが、気に入ってはくれたようだ。

関わる人数が多くなると、いろいろとトラブルが増えるようだが、なんとかうまくやっている。

「そういえばお前の名前なんだったか」

「ジルです」

「ああ、そう、そうだったな。 じる か」

「あつてはいるのですが何か少し違うような感じがしますが」

「ん？ 汁じゅう だよな？」

「えっと、はい……」

汁じゅうは少し納得がいけないようで首をかしげている。

ふっふっふ。当然だ。この呼び方には呪いがかかっているからな！

まー、イケメンとかカッコいい名前とか使って呼んできると精神が微妙に削れてくるから、この呼び方が丁度良いや。

「で、お前は？」

「カフェです」

「カフェ……っつこみにくい名前だな」

「別にその必要は……」

「ああ、可愛くて良い感じの名前だ」

「……」

「そういえば母親の様子はどうだ？」

「あつ、最近は良くなっています。顔色もいいし、言葉数も多くなつて。なんでも夢の中で天使さまをみたとかで」

（……マイナーヒール連打でそういう雰囲気にも包まれた影響……とかかねえ。俺には宗教とかにはまる、よく日本でいた新興宗教の信徒のあの雰囲気は理解しにくい。まあ生きる気力になるなら一時的にはそれでもいいか）

しかし、汁とカフェ、つまり味噌汁とコーヒーってこつたな。

両方、飲み物系だよ。

第29話 回避

「いらっしゃい。いつものかしら？」

「ええ、お願いします」

綺麗なお姉さんの道具屋。

初回は失態をしたが、まあ別に気にせず何も無かったように利用している。

あくまで知らぬ存じぬで押し通した。

いつものつというのはガキらに渡すポジションを俺がさも使ってるように偽装している奴だ。

俺はついでに、何か事前に用意しておいたほうがよい物、いずれ使うものが無いかと店内を物色する。

そうしていると何故かいつもとは違い、お姉さんの視線を妙に感じる。

特に嫌な感じのものではないので放っておいたが。

「はい、ポーション10個で1万ルトよ」

一万ルトを支払い商品を受け取るうとする俺。

そこで違和感を感じ、素早く商品を奪い取り、身を引く。

残されたのはお姉さんの両手。

俺の手を下から握ろうとするのを見事にかわした姿になった。

それはもうスカッと。

スカッと。

「私の握手攻撃をかわすとは……やるわね」

「攻撃ですか」

物騒な。まあ確かに健全な男には攻撃力が高そうだが。

「うーん」

「どうかしました？」

「なにかもう、最初に来たときは随分雰囲気違って落ち着いて見えるけど何かあったの？」

「いえ、別に……」

（あの深夜の1階の広場を見て、この街と住人に早くも失望したからだろうな。まあ俺の女性への態度はもともとどうでもいい気分任せだが）

「まったく男の子はすぐ成長するのね。お姉さん嬉しいやら悲しいやら」

「……………」

「またいらっしやい」

「ええ」

あ、ちなみに子猫様は俺の上着に縫いつけたポケットの中に寝て居る。

細工師のクラスのせいか無駄に綺麗に仕上がったポッケの中に。

最近は寝ることが多くなった気がする。

食欲はいつも通り旺盛だけど。

第30話 乞食

掘る！ 掘る！ 掘る！

落ち葉や細かい枯れ木をかける！ かける！

粘土のでっかいボールを綺麗に並べて置く（今回は七つ用意しました）

更にも落ち葉や細かい枯れ木をいっぱいかける！

後は火をつけて3時間ぐらい待つだけ！

今、街の郊外の河の近く。

幼女神様と水遊びに来ています。

まあ他にも色々遊び道具持ってきていますが。

今日は人間バージョンです。

ちなみに俺が細工師の能力を活用してつくった、花染めのピンクっ

ばい色のローブを着せています。

「えへへ」

そんな無邪気な顔で笑いながら水をかけてくるのはやめてくれませんか……

っていうか。

幼女神様、さも当然のように水の上を歩かないでください！

あ、もうわかってる人はわかってるはずですが。

粘土のボールは乞食鶏です。別名富貴鶏ともいうけど。

でも俺は富貴鶏の名前は認めません。

カッコいいじゃないですか、乞食鶏という名前は。

富貴鶏とか自分でお金持ちだとか言っちゃう恥ずかしい人みたいで

す。

むしろ乞食と自分で言えるすがすがしさこそ値千金。

乞食のニュアンスがある料理が、こんなにも旨い。

その落差が特に別の意味で味があると感じさせるのである。

この風情は非常に日本の精神だと呼べるだろう。

「ま〜だ〜?」

「ええ、まだです」

「もーいい〜?」

「まだです……」

（もう2時間は経ってるし、ひとつぐらい味見してもいいかな。案外火が完全に通るよりもジューシーに仕上がっているかもしれない）

「おーにいちちゃん、まあだあ〜?」

「うーん、じゃあもういいですよ。1個だけですが」

完全に猛々としていた火が消えて熾火状態の灰の中からシャベルを使ってひとつを掘り出す。

「さて、お嬢様。割りますか、割りませんか？」

「割る」

差し出したトンカチを手取る幼女神様。

（ちょっと心配だなあ、割れないならいいけど爆散してクレーターとか出来たらどうしよう……スベックがまったくの計算不能！）

「えい！」

おお。見事ですお嬢様。心配不要でしたね。

早速まわりの粘土と包んだ葉っぱを除いて切り分けて器に取る。

「はむっ」

後はこの鶏からスープも用意して……これは半分ほど食べた後、器にかけて味や食感に変化を出して流し込むために用意した。

「もう食べてるんですね。では俺も」

「おいしい〜い〜」

「いや、まだ熱いですって。アツッ」

お嬢様はたくましく育っておられます……俺よりも。

第31話 喧騒

5階の魔物、ビッグタートル。

ビッグではなくビッグである。豚亀。

5階にたどり着いてすぐ響く打撃音。

しかもそれが無数に響き渡っている。

ガンガン、ガンガンともーう非常にうるさい。

確かに鍛冶場と呼ばれるだけはある。

しかしそれとは別に。

何十人もの奇異の視線が最低にウルサイんだよ。

ビッグタートルはとにかく硬いのが特徴の魔物。

その硬さは岩にも等しいという話である。

しかし反面、攻撃力は控えめで。

この狩場ではまず人が死ぬようなことは起きない。

では、この狩場はうまい狩場なのか？ときかれると、

ある種類の人にはうまく。

ある種類の人にはうまくないといえる。

つまるところ、この5階は1階の広場と同じなのだ。

クラスランクが低い人間は、誰もがレベルを上げてても殆どステータスがあがらない。

例えば村人FがレベルがあがるとHPが1か2上がるとして。

これ以上なくレベルあげに時間をうちこんでも、レベル1の時と変わるのHPの最大値のみ。

それ以外は最高に運がよければ何かの値が1上がるという程度のものである。

そんなことが背景にあるから才能が低ランクの場合、

頑張つて経験を増やすよりも、安全確実な狩りこそが最も望まれる対象なのだ。

そして人間の中でも比較的大多数のその低ランクの存在に対し、

それを実現する狩場が非常に少ないという現実がある。

結果としてその低ランク用狩場は低ランクの人間で飽和し、そしてその狩場に運良く残った中ですら獲物の取り合いでまた争いが起こる。

いや、ホントに美味しい狩場だわ。

なにしろいくらでも安全に狩れるのだから。

そのくせ結構金になるというのだからたまらない。

おまけに助け合つという人間性を捨てることまで簡単に出来る素晴らしい狩場だわ。

そう……簡単に。

こんな言葉使いたくないけどホント糞つたれだ。

俺は無心で、いや無心になるように、

奇異と敵意の視線をいくつも受けながら5階を歩きまわる。

5階には本当に多くの人がひしめきあっていた。

その雰囲気から判断すれば、

元々人と争うことが非常に好きな人――

自分は働かずお零れを得ようと必死な人――

ただ多くの他人と同じことをすれば正しいと断定し何も考えず狩っている人――

そして疑問を持ちながらもどうしてもここで狩らざるをえない守るものを持っている人――

そうして6階への階段と4階への階段の連絡を確認してから――

多分俺が狩ることはもう永久に無いであろう場を後にした。

第32話 希少

通常、戦闘系のクラスを持っていない、もしくはそのランクが低いものはこのダンジョンでは5階で詰むと言う。

どれだけ良い武器を持っていたても、6階と言うものは魔物の住む階と言われる。

そもそもどこもダンジョンは魔物だらけだが。

あえて言うなら、精神の中の魔物、死の恐怖をあおられるほど厳しい階ということか。

6階を通るものの半端な強さの人間の多くは、

もしくは亀狩場にあぶれて4階では満足できず上位階に移動しようとするものは、

出来るだけ重装備をしてPTを組んでから突破するのが定例らしい。

そこで俺が出した結論としては、今無理に6階に行っても得られる物は少ないと言うこと。

しばらくは3階のパープルウルフ廃狩りで様子を見て、レベルや装

備やスキルやらを整えてからと、連日のように自分ですら呆れる程の数のパープルウルフを狩っていた。

「ハハッ！」

笑い声では無く掛け声である。

ちなみに八に1回の蹴りが対応している、ただの2連撃だ。

俺の目の前の道には、一面に無数の核が転がっている。

何故こうなったかと言うと、

最初は「もう核なんてとるの面倒じゃね？」

ということでレベルあげを重視で、人のめったに來ない4階奥の袋小路近くで一心不乱に狩っていた。

そうするとだ、なんと！ ある程度時間が経った魔物の死体は核だけ残して消えているではないか。

そしてそれを拾いながら時々沸く魔物を個別に倒している。というわけだ。

今更だけど——これっていちいちもぎりとするより早いよね？

「ハッ！……ん？」

反射的に蹴りを入れたパープルウルフ、

いや、そういうには色が黒すぎて体躯が小さい個体。

それはほぼ確実にパープルウルフを一撃で倒してきた俺の蹴りを受けても——

わずかによろめきながら立ってきて、こちらへと攻撃をしてきた。

「なんー！つと」

戸惑いながらももう一度蹴りを入れる。

今度は立ち上がってこなかったが、それでもまだ息はあるようだ。

「なんなんだ？ これ……」

俺は震える黒い小さな個体を上から見下ろし疑問の声を呟く。

そして幼女神様も興味を持たれたのかポケットから顔を出してくる。

《あつ、このこ地獣だ〜》

《ん？地獣ってなんですか？》

《たまーにでてくるこなの》

《レアってやつですか。幼女神様、倒しちゃだめだった？》

《たまに属性が聖に反転するの〜》

《じゃあ、良い魔物ってこと？》

《うん！ そのうち聖獣とか天獣とか神獣になる！》

《ええつ、じゃあ俺そうなったときに仕返しされるんでは……》

《だいじょぶ。ほら！》

子猫さまの目線の先には、さきほどの黒い小さな狼が這い蹲りながらも、尻尾を振って仲間にして欲しそうな眼でこちらを見ている。

《たぶんたおして殺さなかったから！》

《んー、負けたのは自分が弱いせいだと思ってるから恨まないで、なおかつ殺さなかったことで感謝、いや平伏してるってことかな》

《うんうん》

《そういう精神なら確かに邪じゃなく聖にちかいのか。なんか急展開だがとりあえず回復してあげとこう》

「おい、おちびー、動くなよ?——百の神の慈悲と千の眷属の業が我が手に宿る。マイナーヒール」

第33話 小粒

「こら、脚の周り走ってちや俺が動けないって」

《めっ》

俺と幼女神様にしかられたチビはきゅーんと鳴いて反省している！

んー……こいつの名前は何にしようかなー

チビじゃいくらなんでもだし、なんかさ、その名前付けたら逆に大きくなりそうなジंकスというか……

じゃあ黒にしよう！ってことでも、大きくなると色が変化したりとか。

確実にありそうだねー……………！

「うーむ、おちび、いやこちびとかどうだろ……………」

「く……………」

「うむ、こちびでいいか」

スリスリと俺の脛に首を撫で付けるこちび。

中々可愛いではないか。

しかしだ。

よくRPGなんかではこういうのが戦闘の補助をしてくれるんだけど。

タフさはここの魔物より高いけど、戦えるかっていうとどうかな。

オロチとかいくともう一飲みにされそうだし、危なっかしいわ。

こちびがグツタリして飲まれる様子とか考えたくも無い。

レベルあがると強くなったり、大きく変態するのかな。

ならスライムからここまでの敵を倒させてみるってのもありか。

俺が散らばっている核を摘んでいると、こちびも尻尾を振り振りあつちこつちと核をくわえてきては俺の前に置いていく。

「おおー、こちび超偉い！ 頭良いな」

「くーん」

こ・れ・は！

核の拾い集めスピードアップではないか！

たどたどしくて、一生懸命なものも萌える！

更にお手伝いスキルがレベルアップして直接核用袋に入れてくれればその間狩れるし、大助かりなんだけどな。

そこまでは無理だろ。

いや、そうか。

ここには無理がなさそうな方が居るじゃないですか。

《幼女神様、こちびに念話で色々教えることができます？》

《うん！》

《もう万能ですね……じゃあ袋に直接入れるのと、近くに無くなったら袋を落ちてる場所に移動させるのを頼みます》

《ぷりん！》

《むっ、それを要求しますか。プリン気に入っ たんですね》

《にへへ》

《わかりました。帰ったら家に転移させて貰って作ります、ですから頼みますよ》

《もう終わってるもん》

《返事を聞く前に終わらせてるとは。お嬢様、それでは下々のものとは交渉は成功しませんよ、お嬢様らしいと言えはらしいですが》

《ぷーりん》

《わたくしめが責任を持って用意致しますので！》

第34話 揺揺

プリン、それは洋風茶碗蒸し！

へ？

間違っていないよ？

水の代わりにミルク入れて、砂糖味にするだけで基本できるし。

簡単簡単！

牛乳と卵黄と砂糖だけでできるんだから。

さあ君も冷蔵庫から材料をちよろまかしてトライ！

適当に混ぜた後、そのままペロつと味見して調整。

出来れば目の細かい茶漉しで濾しておくとか滑らか度うっぷ。

それを良く洗ったコップに注いで、ご飯保温中の電子ジャーに入れ
とけば勝手に出来る。

出来たら冷やすだけだ。

分量？時間？

こまけえことはいいんだよ。

自分の舌を信じて加減しつつ、何度か作れば覚える！

レシピ公開してる人は皆そうやってきたんだから。

気に入ったらカラメルソースも作ってみようぜ！

砂糖水を煮詰めるだけだからな。

「よし、お前ら、子猫様に拜んだか？ 準備はいいか？」

バケツサイズのプリン五個と子猫さまを中心にがきんちよらを配置する。

汁やらカフェも目がキラキラしてる。

こいつらと出会ってからテーブルに出る食料使ったものとか、乞食鶏とか色々分けてやったからもう俺の出すものの味はガキども公認だ。

うにゅーん祈りでジユバつと出てくるアレだが最近大量の食料以外にもなんかでてきてるんだよ——最初にケンダムとかフリスビーが混じってたときは一瞬混乱しちまったぜ。

廃屋の中は比較的広いがもうギュウギュウ詰め。

俺のつくってやったマイスプーンと器を手にウズウズしている皆の衆。

錬金術の練習で作った純度の低い不出来な鉄をトンカチでカンカンやってみたのだ。

少し、鍛冶のスキルも上がった気がする。

「よーっし、食べて良いぞー、ゆっくりとれよ」

おそろおそろ、かつ我慢できない感じで次々子供たちがプリンに群がる。

めちゃくちゃにならないのは今までの教育のたまもの。

最初からわけてないのは、子供らの行動を見るためだ。

自分だけじゃなく、他も気遣える、将来の幹部級の選別と言おうか。

例えば汁とかは自分の分よりも先に子供らによそってやり、カフェは自分のを確保してから子供らによそっている。

献身の騎士、安定の文官って感じかね。色々個性があって面白い。

俺も周りを見ながら子猫さまとこちびに取り分けてやる。

こちびなんだがコイツは何でも食べる。が、主食は核だ。

なんかやべえパワーアップフラグがたった予感が！

って、もう取り分けた分食い終わってるし。

《もつと》

《いやいや、お嬢様の異次元胃袋をここで披露しちゃいけません！》

え？ 幼女神様にもつと食べさせる？

ああ、大丈夫ですよ

ええ。

当然、夜のおやつにもう1個でつかいの確保してありますから。

人間バージョンではむはむするところを見たいんでね！

第35話 要領

「エルフの髪の毛……………」

寝っころがって子猫様を腹の上、こちびを小脇に魔改造指南の書を読む俺。

少し古臭い文章に戸惑いながらも読み進め、何度も読み返す。

それで——最初にまず必須とあるのが エルフの髪の毛 だ。

だがエルフなんてのはそもそも絶滅したとも言われていて、その髪の毛など入手できるわけもない。

はじめのあたりこそ「ふーん」という感じで読んでいたが。

中ほどまで読んでもあくまでエルフの髪の毛が手元にある状況でこそ成り立つ技術の話ばかりであり、まったく現実的な取っ掛かりが無い。

そういうわけで少しやきもきしている感覚がぬぐえないのだ。

「入手した髪の毛の一端を固定し、それを指でしごくと滑らかに動かせるときと引っかかる時があり、それで魔力の流れる方向を判断することができる、ねえ……………ふむ」

俺は当然のように自分の髪の毛を一本抜いて、一方を爪で摘んで、そこから指の腹でしごいてみる。

「おお、俺のでもわかるわ。確かに引っかかる方向がある……………これは面白い！」

（エルフじゃないが、俺の髪の毛でも微小な効果は期待できるかな？——どうせはじめに作る予定の魔道具は一番簡単そうな魔灯だしなあ）

まずはわずかでも成功の事例が欲しい。

例えば豆電球ほどの光しか出なくてもだ。

「ふむふむ、耐熱布に髪の毛で魔陣刺繍を施し、魔力を流すことによって望む効果が発動する、つか。光は真円、風は渦巻き、火は三角、水は器、土は四角を基本と……」

うーん。

作る予定の魔道具は魔灯だから？

この場合は——魔陣刺繍と言われる髪の毛で真円の刺繍を施した耐熱布を用意すればいいんだよね？

だが耐熱布なんて入手のつてがないんですけど。

どうせ実験で燃えるまですらいかないから普通のでいいかねー。

他にも細かい安全装置やら安定術式の技術が載ってるけど、まいっか。後回しで。

なんていうか、日本に居た頃の科学書みたく、何でもかんでも小難しく書いてあるが——結局のところ科学技術に例えてみれば、魔陣刺繍がフィラメント、髪の毛が導線、核が電池となる。そういうことだろ。うん。

いや、なんじゃこりゃ。

髪の毛を爪でビーツてしごいてみると、くるくる巻き毛になったからそこに核をくっつけてみたら、核から魔力が流れて風が起きてる

のがわかるんだが。

こんな簡単でいいのか？

しかし、技術なんてこんなもんか。

例えば元の世界の発電だって、単純なモーター逆回しで出来るもんな。

これって毛が水路みたいなもので、そこに水を流すと途中で止まって更に流れるから決壊して、その反応が魔術になるっという感じだな。

そういえばなんか魔法使いになってから魔力が頭皮とかでピンピン感じられてたのはもしかして髪の毛で空気中の魔力を吸収してたから？

いやまてよ、それだと癬毛の人は頭が扇風機に？

んー、それより前に魔力が頭皮に吸収されるか――

じゃあ空気じゃなく核を直接つけてみると……

「うほっ、魔力が来る〜」

清浄化機構つてのが無いと効率は悪いらしいが――「これはもし

かしてMP使い放題フラグ！

更に魔改造の第一歩を確立して、今日の俺は調子にのってるかもし
れん。

「みーみいー」

「くーん」

第36話 心傷

「最近おかしいよな……」

何がおかしいかと言うと、昨日魔道具の基礎を理解したと思ったらあっさり魔灯が出来てしまったのだ。

しかも市販品よりも数段、能力も見た目も上等なものが。

耐熱布なんて必要なかったわ。丸い棒に巻きつけて固定しただけで出来た。

魔道具屋で一度実演してもらった魔灯より3倍ぐらい明るいし。

更に見た目は、こんな感じのがセンスいいかな〜とか言いながら細工してたらイメージ以上のものができた。

能力は錬金術師の理解力と技術、見た目は細工師や鍛冶師の匠の技。レベルを上げれば能力がついてくるのはわかるが、あっさりと出来るとなるといかピンとこない、納得できない部分がある。

俺の色々な過去の努力はなんだったのか、と。

まあそれはいい。まだクラスの恩恵で理解できるから。

更におかしいのはエルフの髪の毛じゃなく俺の髪の毛で作ってるのに、オリジナルより能力が高いつてことだ。

思うに、エルフの髪の毛はエルフそのものが魔法のセンスが高く、髪の毛の魔力の伝導率も高いのだろう。

ということはだ、エルフではなくランクの高い魔法使いの髪の毛でも代用できるってことだ。

そして本に載ってる通りに作ってるのに、俺の魔灯がオリジナルの光量を超えるってことは、エルフの髪の毛よりも俺の髪の毛の方が魔力の伝導率に勝ってるってこと。

魔道具屋で見たものが同じ機構ともエルフの髪の毛が使われてることも限らないが。

で——つまり俺の魔法使いのランクは相当高いつて予想にたどりつく。

そつえば最近はい　ライト　が異様に眩しくなつたんで調整しながらやってるけど。

格闘がMPいらすの使い勝手最高だつたんで試してないが、今度つから魔法も狩りに使ってみるか。

さて次はい　すらいむばすたー（棒読み）　の起案にとりかかるぜ！

深夜、丁度ガキらの狩りが始まる時間に呼びにこいといい、今、例の広場についた。

「あの、今日は何を……」

「ああ、ちよつと待て」

お手製の魔灯を取り出し、パープルウルフの核をセットする。

たちまちのように薄暗い広間は少しまばゆいぐらいの光に照らされた。

驚くガキらを尻目に、まとめ役2人とガキどもを促し、広間より奥の道へと移動する。

ちなみに広間の既存の魔灯はガキらには触ることが出来ない。

これも核を入れれば使用できるようだが、流石に高価な値段の魔道具を気安く使用したり、取り外されたりしないように厳重に力ギがかかっている。

そりゃそうだ。核を入れる部分なんて機構の中核だからな。

ガキども全員を広間以降に連れようとしてるのだが、どうも様子が

おかしい。

怯えている子供までいる。

一応わけを聴いてみるとやっぱりと言えはやっぱりか、

何度か広場以降へと狩場を拡大しようとしたが、最初はうまくいった、

そして油断して2人が死んだ。そしてそれっきりらしい。

（トラウマか……）

だが精神に傷があるといってもそれを許すわけにはいかない。

優しい人間に説得されて、戦場にいき死んでいく人間は少ないが、徴兵と言う権力が背景の暴力で、戦場にいき死んでいく人間は数知れなく居る。

優しさと言うものは本当に弱い。

今は俺の言うことを聞いているこいつらも

ほんのわずかなきっかけで反抗をする。

全員に優しくし続けるなんて個別に対応するのは不可能に近い。

暴力は本当に強い。

内心ではどれだけ文句を言おうが、

一度命令されれば忠実な機械となる兵たち。

どんな人間も肉体への暴力には抗えない。

たまに反抗する人間も、死んでしまえば逆に他へ見せしめとなる。

とはいえ、それはあくまで行使する側が圧倒的な力を持っているからだ。

最も重要なのは、理解できていないから。

何故、自分らがこうなったのか。

結局、敵の大きさがわかってないだけだ。

そしてそれに対応する気構えも足りない。

敵が自分の想定した大きさでなければすぐ逃げてしまう者ばかりだから。

闘う者に、敵を前にした不明や撤退など必要ないんだ。

だから、俺が本当の敵の姿、現実と言うものを見せてやらないと。

第37話 遊戯

広間に近く、階段への道と分離している狩場。

これが俺の事前調査で選んだ場所だ。

深部からの狩りから戻ってくるものとかち合いにくいように。

「ここが今日からお前らの狩場だ」

「ここが？」

「ああ。ジル、いや汁とカフェ、手伝え」

そういつて持ってきた荷物、布で包んだ——ちょうどゴルフバツグに近い形状の荷物を解く。

布を剥いだ中からは、小ささまざまな大きさの棒、いやパイプがでてくる。

（それにしても、名前を言い直したことにつっこまれないとは、これも教育のたまものだな）

さて、これらのパイプ。

スライム駆除に特化した、俺の苦心の研究の成果！

その名も ヒートロッド、いや ヒートパイプ である。

この武器の発想のヒントは、

誰もが一度はやったことがあるであろう行為。

粘土にストローをぶっ刺す、あれ。

何度も何度もぶっ刺すと、粘土の表面が荒れまくって、見るも無残な姿になるヤツだ。

俺は比較的太目の、年長者用の攻撃力が強いものを選んでふたりに渡し、

「よし、その柄の部分を持って、先端をスライムにぶっ刺す。ブスつとな」

「えっと……………わかりました」

「刺しました」

「何度も何度も刺せ」

納得いかない様子ながらも、何度も言われたように刺しているふたり。

しかし数十度も繰り返し、スライム表面が荒れてくると要領を得たのかガスガス、ガスガスと熱心に刺しまくる。

時々斜めに突き入れて削り取ったり、捻ったり、体重をかけたりして創意工夫をしている様子も見られている。

ほどなく、あの幼き頃に良くみた荒れ果てた粘土の表面のようになったスライムだった残骸と――

それと反比例して得意げな顔をしている汁とカフェ。

スライムがクラッシュゼリーみたいになってるし……

しかし思ってたよりもうまくいった感じがする。

刺した部分がめちゃくちゃでどうやっても再生不能といった具合。

何しろ、指した部分の中の組織がその他と隔離されるからな。

こういう傷は人間でも再生しにくい。

「よし、皆、ふたりがやっているとところは見たな。こいつを配るから同じようにやってみろ。攻撃されないように注意しろよ！」

いつもより数倍早く倒されていくスライムたち。

魔灯で照らされる子供たちの顔には、最初の、広間以外に連れ出されたときの怯えはもう見当たらない。

むしろ粘土のストローめった刺しを楽しんですらいるような。

って、楽しんでるよなー、どう見ても……

——まあ対スライム武器としてはベストではない。それは俺もわかっている。

だが、ベターではあるのではないだろうか。

一撃で狩れたら、訓練も兼ねたものとしてはふさわしくないかな。

奥の手の 焼きストロー機能 は、しばらくは内緒にしておこう……

第38話 火柱

「錬金！」

錬金術師関係の本は入手しづらく、研究しにくいんだけど、まあ適当に勘だけで手探りしつつ頑張ってはいる。

あの特に二次創作が多い某小説の知識はかなり使える。うん。

やっぱりまずは青銅だよな！。

青銅っていつでも実際には薄金色のピカピカなんだが。教科書に紹介されてるような緑青がびっちりついた青緑色ではなく。

誤解してる人が多いけどね。

ま、色は含有率によって変わるんだけど。金以外にも白銀色とか銅色に。

こちらでも誤解してる人が多いが、青銅は実際には精錬具合が緩い鉄よりも比較的強い。

そういうわけでお手軽な武器作成用の素材としては重宝すると言っただけだ。

俺は今、ノンアクティブ狩場であるラージバニーのいる2階で魔法の使いまくり、試し撃ちとMP限界の把握をしている。

先ほどの鍊金もその一部。

試してみたが、青銅と鉄、銀までは鍊金出来る。

鉄は前にも鍊金していて ヒートロッド の素材もこれである。

青銅はちよつと耐熱性に不安があるから熱ギミック内蔵装備には使えないね〜

銀はまだいまいち何か手ごたえに違和感が生じる。

なので一度には非常に少量で、かつ不純物の多いものしかできていないみたい。

これもレベル上げたら大量に作り出せるようになるのかな〜

そしていずれは鍊金の名の通り、金をつくり出せるようになってウツハウハ。

いや〜、楽しみだな。

さて、次は攻撃魔法でも試してみるか。

「くーん」

「我に流れる灼熱の血よ、怨敵を葬る飛礫らとして顕現せよ　ファ
イアブリット！」

その数も100個以上。

眼前に浮き上がるように出現した、パチンコ玉、いやビー球程度の
大きさの緋色の弾が詠唱終了と共にラージバーナー5匹の群れに襲い
掛かる。

「うお、すげえ。穴ぼこあきまくりのぼっこぼっこだし」

あのY字型のパチンコで打たれた程度の速さで放たれたその弾は、
目標とされてしまった全ての魔物の体表面にショットガンを撃たれ
た痕のような様相をつくりだした。

（さすが攻撃魔法。魔法使いが攻撃力だけはトップクラスと言われ
るのも肯ける。防御力にはつつこまない方針で。うん、つつこんじ
ゃあいけないんだ）

「さて、次はと……あれを試すか」

教師のクラスで強化された記憶力、というより想起力によって思い

出せた、そう、まだ両親との距離も疎遠でなかったあの頃に寝物語で聞かせてもらった、英雄譚に出てきた女魔法使いがもつとも得意とした攻撃魔法の呪文を口にする。

「絡み合う原初の伏と女の神々よ、我に仇なす敵たちに百度の滅びを与えたまえ—— フレイムピラー！」

安全マージンをとってかなり遠くの群れに向かい、力んで放たれたそれ。

俺にとっても思い出深いその魔法は——

縄をピンと張ったような、ふたつの火柱がDNAのように捻りあいながら——

的となったラージバニーの群れ全体を包むような巨大な柱となって一瞬のうちに焼き尽くす。

そしてそれにあきたらず、

おそらくは過去の魔法使いたちの力によって阿頼耶識に刻まれた魔術イメージ補正によって、

俺のイメージを更に更に超えて、物質世界に溢れ出る攻撃力となつて止められない勢いで乱れ狂う。

何度も何度も何度も。

最初の狙いの地点を中心に、幾本もの火柱が荒れ狂い、

それはいくつものラージバニーの群れを巻き込み、灰塵へと化させ
て――

さながら、大灼熱地獄のような光景が展開される。

「ちょ……、これはまったくシャレにならない……」

「みゅ」

「く〜ん」

第39話 防護

フレイムピラー の呪文は封印した！

しばらくのうちはだけど。

必要があつたら使つわな。

例えば盗賊、山賊退治とか。

まったく躊躇なく倒せる敵には試しまくってもいいか。

群れ相手には効果的だと思う。

いや、最初のアレで素早い奴は逃げちゃうから、殲滅という点では
いまいちか。

使いどころがむつかしい…

あえて考えると封鎖空間にぶちこむのが効果的だな。

迷宮の広間や、盗賊の砦とかに。

つつか、あれから何種類もの魔術を試しまくってはいるのだが、M
Pが無くなる様子が無いんですけど。

しかしだ、 フレイムピラー の魔法を見て思ったのだが、

攻撃魔法怖すぎだよね……

こんなのビシバシ放たれたら、どうやって対処すればいいんやあ！

これは早急に対策をねらんとアカンってことで。

「慈悲深き聖母の抱擁よ。彼を害する全ての災いから守りたまえ
ホーリーベール」

我、ではなく彼。

目の前でモフモフしている良く見るとあんまり可愛くないラージバ
ニーに向かって、防御系補助魔法をかけてあげるものすごく優しい
雰囲気イケメンな俺。

え？

魔物に補助かけてどうするって？

そりゃ鋭い人はもうわかってると思うけど、当然こうする。

「我に流れる灼熱の血よ、怨敵を葬る飛礫らとして顕現せよ　ファ
イアブリット！」

たちまちに群れごと、突然出現した暴力の化身ともいえるオレンジに輝く高温の弾たちによって貫かれる可愛くないラージバーニータち。それでも先ほど防御魔法を施した1匹のみは、動けない程度のダメージを負っているものの、体表面には重症、とは呼べるほどの傷は見当たらず――

「ふうむ、これでは　フレイムピラー　の呪文に耐え切れるかはあやしいな――　ま、それはともかくやはりもう少し詳細なデータが必要だ。よって……………」

「我に流れる灼熱の血よ、怨敵を葬る飛礫らとして顕現せよ　ファ
イアブリット！」

「我に流れる灼熱の血よ、怨敵を葬る飛礫らとして顕現せよ　ファ
イアブリット！」

「我に流れる灼熱の血よ、怨敵を葬る飛礫らとして顕現せよ　ファ

「イアブリット！」

「我に流れる灼熱の血よ、怨敵を葬る飛礫らとして顕現せよ
ファ
イアブリット！」

「我に流れる灼熱の血よ、怨敵を葬る飛礫らとして顕現せよ
ファ
イアブリット！」

「我に流れる灼熱の血よ、怨敵を葬る飛礫らとして顕現せよ
ファ
イアブリット！」

「我に流れる灼熱の血よ、怨敵を葬る飛礫らとして顕現せよ
ファ
イアブリット！」

「我に流れる灼熱の血よ、怨敵を葬る飛礫らとして顕現せよ
ファ
イアブリット！」

「我に流れる灼熱の血よ、怨敵を葬る飛礫らとして顕現せよ
ファ
イアブリット！」

誰だよ、鬼畜とか言い出す奴は！

でもさ、こいつら目が可愛くないんだよ。

知ってるか？

パンダの目って本当は鋭くて、結構怖いってことを。

モフモフ詐欺には注意だぜえー。

第40話 要求

今日はゆったりまったりと優雅に過ごします。

あー、さっきまで幼女神様とおままごとしてたんだ。

こちびは子供役。俺夫。幼女神様が新妻。

ふっふっふ、聞いて驚け。

幼女神様がいつてらっしゃいのキスをしてくれたんだ。

ほっぺにな。

これが娘を持った父親の気分かと有頂天に。

でもその後がヤバかった。

「あなた、なんでつかこのクチベニは〜」

いや、そんなもの見えないし。

なんでこう女の子ってのは昼のメロドラマ展開へと曲げていくのか。

「うっ、もうわたちを愛していないのね……」

「そんな！毎日料理を作ってあげてるじゃないか！愛してるよ！」

「く〜ん」

「ほんと？」

「ほんとだとも！」

多分ニコツと笑ってる俺。しかし最近髪伸びたな。魔道具の素材になるからいいけど。

「じゃあ、おいしいもの、つくってくれゆ？」

「ああ、何でも言っつて。すぐ作るよっ！」

「いちごプリンとかぼちゃプリンとチョコレートプリンとまっちゃんプリンとコーヒープリンとバナナプリンとヨーグルトプリンとキヤ

ラメルプリンと黒ゴマプリンとクリームプリンとミックスプリンとマロンプリンが食べたいの〜」

可愛く小首をかしげて要求を告げる幼女神様。

しかし言っている内容はまったく可愛くない。

「あ、ああ、30秒待つてね！」

魔道具の基礎を極めた俺はこんなときの為にと大きめの冷蔵庫を作り上げておいたのだ。

ちなみに動力は当然、買取に出していないあまった核を使っているが、核の数は減るところかますます増えてきている。

今度は幼女神様に頼らなくても、ウチの神殿に転移出来るポータルでも作るかな。ちよつと誤転移が心配だが……

「はい、いちごとみかんとパインと桃の超ビッグなミックスぷりんですよ〜」

「わ〜い！」

え？ 要求と違うつて？

まあ基本差し出したものは食べてくれるからねえ。

そこはそれ。扱いは心得ている。

「苺シュークリームも試作したのですよ。食べてみますか？」

返事の前にタタッと駆けてきて、両手を出してくる。

すぐさま渡して、口へと運ぶさまを見つめる。

「おいちい！」

ハイテンションで微笑む、俺の幼女神様。

この後は15分ほどで全て平らげて——「こちびと一緒にオヤスミになられました。」

ゆっくり……おやすみくださいませ……ぐっ……

第41話 止雨

今日は魔道具屋のお姉さんに貸してもらった 魔改造指南の書を返しにきました。

良く読み取って、要点のみを食料に混じって入ってたジャポ。力学習帳に写し取りましたのもう不要です。

魔道具屋のお姉さんは変なお姉さんだからちょっと怖いけど、困ってるボクに貴重な本を貸してくれました。

ですので、ボクは大好きです。

おねーさん、ありがとう。

「……………ひとつだけ？」

「うん。閉鎖空間確保の為の期間短縮方法がちょっと」

そう、もうあの本の大体の内容は完璧にマスターしたのだが。

大抵のチート系小説には出てくる異次元ポケットというか異次元格納倉庫というか。

あれがちょっと作れないんだよね。

一応作り方は書いてあるんだ。でもね。

1年以上魔力を使用し、発動し続けさせることによって亜空間を開くっていうものなんだよ。はあ。

つまり作ってから一年はつかえない。

その後も空間が大きくなるまで待つて、なおかつ核を消費しないといけない。

一度でも魔力供給を止めると亜空間は収束していく。

この仕様はちょっとシビアすぎてきついかな？と思って相談をしているのだが。

一年待ちとか、どこのフライパンだよって。

あ、今は一週間のようだけだな。

「……………待つて、あなた、エルフの髪の毛はどこで手に入れたの？」

「えーっと、そもそもエルフの髪の毛じゃなくて出来ますよ、魔法関連のクラスについている人のなら」

「……よく、よくわかったわね……わたし5年もかったのに……」

「きっかけが無いと難しいかも、年数は関係ないような??……」

（実際俺も日本人の感覚と魔法使いのクラスを持ってないと投げてたと思うし。理系だから実験大好き！）

「うん、そう、そうね……」

お姉さんは納得半分、そうできない気持ち半分で肯いている。

「仕方ないのかな。今から作って出来るのを待つとしようと思ひます。やっぱ近道は無いのか……はあ……」

「ウフフ……」

「ん？ どうしたんで……」

（なんだ？ 様子がおかしい）

「ウフ、うふふ、うふふふふふ、うふふふふふ、うはははははははははは」
はっ——「！」

何とか説得したり、俺の作った魔道具を見せたりして。

んで、ときどきここにきてお喋りしたりで情報交換の報酬に――
――お姉さんのおさがりの異次元バッグをしばらく借りることになった。

これで大量の食料を持ち歩くのが楽になる。

はあ、疲れた。

第42話 廃墟

「……ダンジョンエムイーへ……ようこそ……ゆっくりしてってください……」

「あ……はい……」

（大丈夫か、この人、今にも死にそうだぞ……）

なんというか、話がまったくわからないのだが。

とりあえずわかってることとしては、ここには幼女神様の従姉妹のおねえさんがいるらしい。

それで有無を言わず連れられてきたんだが――

しかしなんだろう、この寂れ具合は。

エクスピの方のダンジョン街は、不満点が無いと言えば確実に嘘となるんだが、平均点より上かという点、渋りながら上と答えるぐらいの街ではあった。

しかしここは……既に廃墟のようではないか……

《あるくの〜!》

《あ、ああ。わかりました。幼女神様》

（まあここに住むわけでもないし、どうでもいいか。ダンジョンがあつて、魔物が居て、核を落とせばそれでなんとかなる。ギルドは……買取をやつてることを祈ろう……）

《酷いな……》

《うん……》

あまりにも酷い街の様相に心なしか幼女神様もテンションが低い。

人々の視線も、昔のオレというより、単なる飢えた貧民だ。

昔の世界での、領主に搾り取られて反抗すら出来ない民の群れ。そんな感じであるわけで。

「ゴホッ」

「けほ」

少し離れた道端に座るホームレスと思われる親子が2人揃って咳をしている。

別に「お恵みを」というサインでもなく、本当に具合は悪そう……

《うーん、居心地悪いな、無視していくのも》

《どうすゆの？》

（ここで俺が何かしても、一時的だからなあ……）

中には……助けたあと、ひたすら媚びてきて、俺にすがってきて、

あげく「最後まで責任取れないなら助けるな」とか言われて。

そうやって元々親切な人たちも優しい心を削り取られていく。

他人を利用する気しか持っていない寄生虫に関わればそうなるのも当たり前。

そんな悪循環にはまり込む気は更々ない。

とはいえ、人の心をしっかりと持ち続けている者も当然それなりに存在する。

そのような人を助けられれば、またこちらが困っているときにも助けてくれる、あるいは生涯の友人になることもある。

しかし寄生虫と善人の見極めは難しく、そんな事が最初から出来れば、人の世の中はもっとマシになっている。

それゆえに、その大事な人となる可能性を逃さないためにも、最初は広く浅くでもいいから関わって、というか狙って浅く関わって、帰ってくる反応を見て今後に関わる価値があるか見極めるのが最善。何も返さないで「もっともっと」と言い出す奴は切り捨てるに限る。

例え寄生虫の立場を望む人たちから偽善者と罵倒されようともね。

母親に抱かれている小さな女の子は、ひっきりなしに小さな咳を続けている。

（ちょっと酷いな。とりあえず声をかけてみるか……）

「大丈夫ですか。お子さん、咳が酷いようですけど……」

「あ、はい……」

（うーん、なんか反応が……もう子供と一緒に死ぬのを待っているかのよう……）

「これ、少しですが食料です」

俺はおねーさんの異次元バッグから出した果物や干し肉等を手渡す

「あ、ありがとうございます、助かります……」

（態度もあくまで控えめ、すがりつく気も無しか。善人っぽい、その清さがこんな立場をまねいた可能性も捨てきれないよな）

まあそれはともかく、子供の方の咳が酷すぎる……

手持ちの錬金術のスキルで作った廉価ポーションぐらいなら使ってもいいか？

この咳に関しても体力が回復すれば治る風邪程度が原因である場合も多いはずだから。

「けほっ、ごほっっ！……！」

「ああっ！」

（うわああ、女の子が血を吐いたあああああ！）

「つつ！ かして！——百の神の慈悲と千の眷属の業が我が手に宿る。マイナーヒール」

神聖な雰囲気的光を帯びた俺の右手から、治癒の力が女の子へと流れ出していく。

次第に安らいだ表情へと変化していく女の子。

しかしその光はこのみならず、外へも漏れていて——

ざわ……ざわ……ざわ……

「治癒術だ……」

「……治癒師さまだ……」

「って、ああ——っ！ しまったああっ！」

「つい マイナーヒール 使っちゃったあああああ！」

第42話 廃墟（後書き）

今日は体調がいまいちなので2話で終わりです。

熱いお風呂に入ってゆっくり休みます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9140z/>

ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

2012年1月7日18時45分発行